

# 第1部 立田山南麓古墳(上)調査報告1



立田山南麓古墳(上)第1トレンチ調査風景 2020/8/24

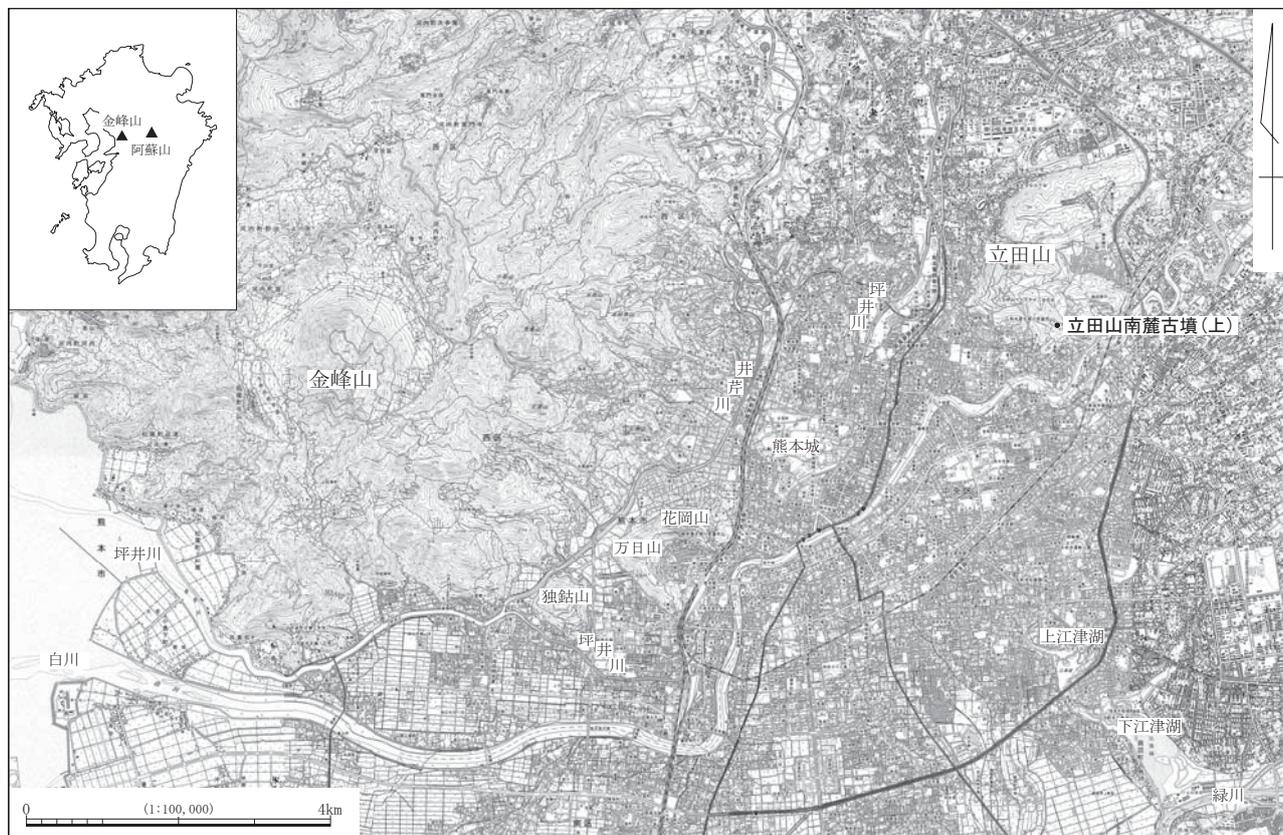
## 一 位置と環境

### 1. 地理的環境

**立田山の位置** 今回調査を実施した立田山南麓古墳(上)は熊本市中央区黒髪8丁目222-5番地および226番地に所在し、立田山の山中に位置する古墳である。立田山は、熊本県中央に広がる熊本平野の北部に位置する。立田山東方には託麻台地と阿蘇外輪山が、西方には金峰山やその外輪山の一部である花岡山などがあり、その西に有明海が広がる。北方には合志台地があり、菊鹿盆地と熊本平野とを画している。立田山が位置する熊本平野は、冬は冷え込みが激しく夏は蒸し暑い内陸型気候である。降水量は梅雨時期にあたる6、7月に多くなり、特に6月下旬から7月上旬にかけて大雨が頻発する。また、7～9月は台風が接近し高潮や暴風雨をもたらす。

**立田山の成立** 立田山の成立は金峰山と関連がある。金峰山は第四紀更新世に成立した火山であり、大規模なカルデラを有していた。現在の金峰山はこのカルデラの中央火口丘である。金峰山成立後の地盤運動によって、現在の立田山は金峰山の外輪山と分離しているものの、地質的には金峰山および外輪山と同質の輝石安山岩などの火山噴出物と二次堆積物で構成されている。

金峰山の成立後に阿蘇山が噴火を繰り返し、立田山周辺の環境は大きく変化する。更新世後期に数万年以上の間隔を置いて発生した4度の阿蘇山の大规模噴火は古い順にAso-1～4と呼ばれ、広範囲に火砕流堆積物を堆積させた。阿蘇山由来の堆積物は流紋岩質の灰～黒灰色の岩石であるため、金峰山由来の火成岩とは明確に区別される。阿蘇山由来の火砕流堆積物が突出した地形だけを残して堆積し、立田山は山頂付近だけが地表に残る独立丘陵となった。



第1図 金峰山・立田山周辺部の地形

**地質** 立田山とその周辺の地質は地学や水文学の観点から研究が進められ、主に基盤岩類、先阿蘇火山岩類、新生代第四紀の堆積物、砂礫層に大別される。

基盤岩類は古・中生代の堆積岩や火成岩、変成岩などである。北部から西部にかけての山間部では、結晶片岩類で構成された<sup>さんぐん</sup>三郡変成岩類と白亜紀の花崗岩類が検出されている。また、熊本市東部に位置する<sup>こうぞのやま</sup>神園山・<sup>おやまやま</sup>小山山・<sup>としやま</sup>戸島山は主に白亜紀の堆積岩類で構成された独立丘陵である。

基盤岩類の上位には、第三紀鮮新世～第四紀更新世に噴出した安山岩類が堆積している。これらは阿蘇カルデラ形成以前に堆積した火山岩類であり、先阿蘇火山岩類と呼ばれる。金峰山由来の火山岩類はこれに含まれる。

新生代第四紀の堆積物はこれらの基盤岩類や火山岩類を覆い、その主体は阿蘇山の火砕流堆積物である。阿蘇山は27～9万年前のあいだに4度の大規模な噴火をおこしており、それによって熊本平野には阿蘇山由来の火砕流堆積物が厚く堆積している。大規模噴火の間も小規模な噴火が繰り返され、火砕流間堆積物が堆積した。それらの中で特筆すべきは、<sup>とがわ</sup>砥川溶岩と湖成堆積物である<sup>ふた</sup>布田層・<sup>かぼう</sup>花房層である。砥川溶岩は立田山の南南東から南東の地域に広がるAso-1・2間に噴出した安山岩質溶岩で、間隙を多く含み重要な帯水層となっている。布田層と花房層はAso-3・4間に堆積した難透水層で、地下水を浅層地下水と深層地下水に二分する。Aso-3より下位の火砕流堆積物の層は第2帯水層とよばれ、ここに貯留される地下水が深層地下水である。

地表付近ではその後の流水の働きによる砂や礫で構成された堆積物が分布し、その上をローム層が覆う。これらの砂礫層はAso-4火砕流堆積物の層(第1帯水層)とあわせて浅層地下水を貯留する。

**河川と地下水** 熊本平野には<sup>しらかわ</sup>白川、<sup>つばいがわ</sup>坪井川、<sup>いせりがわ</sup>井芹川、<sup>みどりかわ</sup>緑川などの河川が流れる。白川・坪井川・井芹川は平野北部を、緑川は平野南部を流域としている。なお、阿蘇外輪山西麓部にあたる立田山以北から菊池にかけての地域は河川が周囲に比べて著しく少ない。これは降水の多くが地下に浸透するためである。

立田山の南を西流する白川は、上流域よりも下流域の方が流域面積が小さいという特異な形をしている。白川の水源は阿蘇山のカルデラ内にあり、外輪山西麓の<sup>たての</sup>立野火口瀬において複数の河道が一つに集約され熊本平野へ流れ出ている。現在では坪井川や井芹川と完全に分離しているが、以前は下流部で合流しており、構造的に氾濫しやすい河川であった。そのため中世末に、白川は現在の中心市街地辺りで強く湾曲していたが直線的に改修され、また湾曲部に流入していた坪井川は井芹川に流入するように分離された。さらに、1930年代半ばには、井芹川も大規模な改修が行われ、花岡山の南麓から北麓へ流路が変更された。

なお、白川の流量については地下の帯水層を考慮に入れる必要がある。河川の流量は降水量をそのまま反映するものではない。地表に降った雨水は地表面や植物からの蒸発によって失われ、一部が河川として地表面を流れ、また一部は地下に浸透して地下水となる。熊本の場合は全国平均に比べて地下水になる割合が高く、降水量に対する河川の流量は比較的少ない。阿蘇山で降水した段階でかなりの割合が地下水となり、加えて熊本平野へ流入して以降も河床から帯水層へ水が移動するためである。

阿蘇山や熊本平野で地下に貯留された地下水は、河川の水と同様に海へと徐々に移動する。合志台地で地下に浸透した水は重力にしたがい熊本平野の地下へ流れ込み、立田山の南南東から南東一帯の地下に分布する砥川溶岩へ流入する。このとき、阿蘇山から火砕流堆積物の層を通して流入してきた地下水と合流し、地下水に強い圧力が加わる。地下水はその圧力を受けて地表に噴出し、平野各地で<sup>えづこ</sup>江津湖をはじめとした湧水群を形成している。(松岡)

## 2. 歴史的環境

### (1) 熊本平野の歴史

**旧石器時代** 熊本平野における旧石器時代の遺跡は主に緑川流域と白川下流域に分布している。代表的な遺跡としては、後期旧石器時代初期の遺跡とされている熊本市南区沈目遺跡や熊本市東区石の本遺跡があげられる。これらの遺跡ではA T火山灰下のローム層から石器が多数出土しており、九州ナイフ形石器文化の最も古い段階に位置づけられている。

**縄文時代** 現在熊本平野では草創期の遺跡・遺物は確認されていない。早期の遺跡は立田山周辺に比較的多く分布しており、主な遺跡としては熊本市北区庵ノ前遺跡や熊本市中央区カブト山遺跡などがあげられる。前期になると貝塚の形成が始まり、後期中葉～後葉頃まで続く。代表的な遺跡として、前期では宇土市の轟貝塚や曾畑貝塚、中期では熊本市南区の阿高貝塚や黒橋貝塚、後期では熊本市南区御領貝塚があげられる。後期には遺跡数が増加し、熊本市東区上南部遺跡などの大規模な遺跡も見られるようになる。上南部遺跡からは、九州では出土例の少ない土偶が 108 点も発見されている。晩期後半になると大規模な遺跡は姿を消し、小規模な遺跡が点在するのみとなる。

**弥生時代** 弥生時代になると、沿岸部から少し内陸に入った台地上に環濠集落が出現する。こうした集落は次第に白川・緑川といった河川に沿ってその分布域を拡大していき、前期には熊本平野のほぼ全域で水稻農耕を行う人々の集落が見られるようになる。

前期～中期の主な遺跡としては熊本市南区八ノ坪遺跡や熊本市西区上代町遺跡群があげられる。八ノ坪遺跡では、前期後半～中期前半の集落が調査され多くの遺構・遺物が発見された。特に、青銅器鋳型や鋳造関連遺物は熊本平野での青銅器生産を示す資料として重要である。また、上代町遺跡群は中期の大溝から「赤漆塗木製剣柄」などの木製品が大量に出土したことで注目される。後期の代表的な遺跡としては嘉島町二子塚遺跡があげられる。この遺跡では鉄製品や鍛冶工房と推定される遺構が見ついているため、二子塚遺跡のような大規模な集落では鉄製品が自給されていたと考えられる。

**古墳時代** 熊本平野における古墳の分布は、平野南縁部（宇土半島基部）と平野北縁部でその様相に大きな違いがみられる。平野南縁部には前期から古墳が存在し、宇土市城ノ越古墳や向野田古墳といった前方後円墳が集中して見られるのに対し、平野北縁部では今のところ前期古墳や前方後円墳は確認されていない。中期以降は、平野北部では熊本市北区羽山塚古墳、平野東部では御船町小坂大塚古墳や嘉島町井寺古墳など、平野各地で有力古墳がみられるようになる。

熊本平野北部に注目すると、この地域における古墳は主に、①白川右岸の立田山の南麓部、②金峰山南麓の丘陵、③沖積平野の中に位置する茶臼山・城山・花岡山などの独立丘陵、④井芹川・坪井川兩岸の台地上面および丘陵〔松本 1998〕といった、平野部よりも高い場所に集中している。横穴の分布も基本的には古墳の分布と似ているが、唯一②の金峰山南麓には存在しない。今回調査した立田山南麓古墳(上)が位置する①の立田山南麓部の古墳・横穴は全て後期以降のものである。この地域に点在する古墳はすべて円墳であり、立田山南麓古墳(上)・(下)や長薫寺古墳などはいずれも横穴式石室を内部主体とすることが分かっている。

**飛鳥時代以降** 熊本平野には律令期の郡家や国府、駅家などに関連する資料が多数存在する。代表的な遺跡としては熊本市西区二本木遺跡群があげられる。この遺跡は古代から中世にかけての資料が豊富であり、特に、官衙に関連するとみられる大型の建物跡や墨書土器など、8世紀後半から9世紀にかけてのものが多く出土している。中世には二本木遺跡群内に国府があった可能性が指摘されている。(追立)

## (2) 金峰山・立田山周辺の古墳分布の様相

今回調査を行った立田山南麓古墳(上)は熊本平野北部に位置する円墳である。本遺跡の位置付けを考える上で、その所在地周辺の古墳分布を把握することは重要である。そこで熊本市域内における金峰山・立田山周辺の古墳・横穴・石棺の集成を行い、この地域の古墳分布の様相を整理し検討を試みる。地域区分については先述した、①白川右岸の立田山の南麓部、②金峰山南麓の丘陵、③沖積平野の中に位置する茶臼山・城山・花岡山などの独立丘陵、④井芹川・坪井川両岸の台地上面および丘陵[松本 1998]の4区分を踏襲する。なお、古墳時代の時期区分については、広瀬和雄氏の前方後円墳集成編年[広瀬 1991]に従い、1～4期前半を古墳時代前期、4期後半～8期を中期、9期～10期を後期、それ以降を終末期とする。

**立田山南麓部** 本地域では後期まで墳丘を伴う古墳は見られない。後期後半から終末期にかけて、立田山南麓古墳(上)・(下)などといった小円墳が築造された。横穴の導入は6世紀後半頃からと考えられており、宇留毛小碓橋際横穴群・つつじヶ丘横穴群などが確認されている。本地域では宇留毛神社境内古墳といった中型の円墳が築造されているが、首長墓が存在するかは不明である。

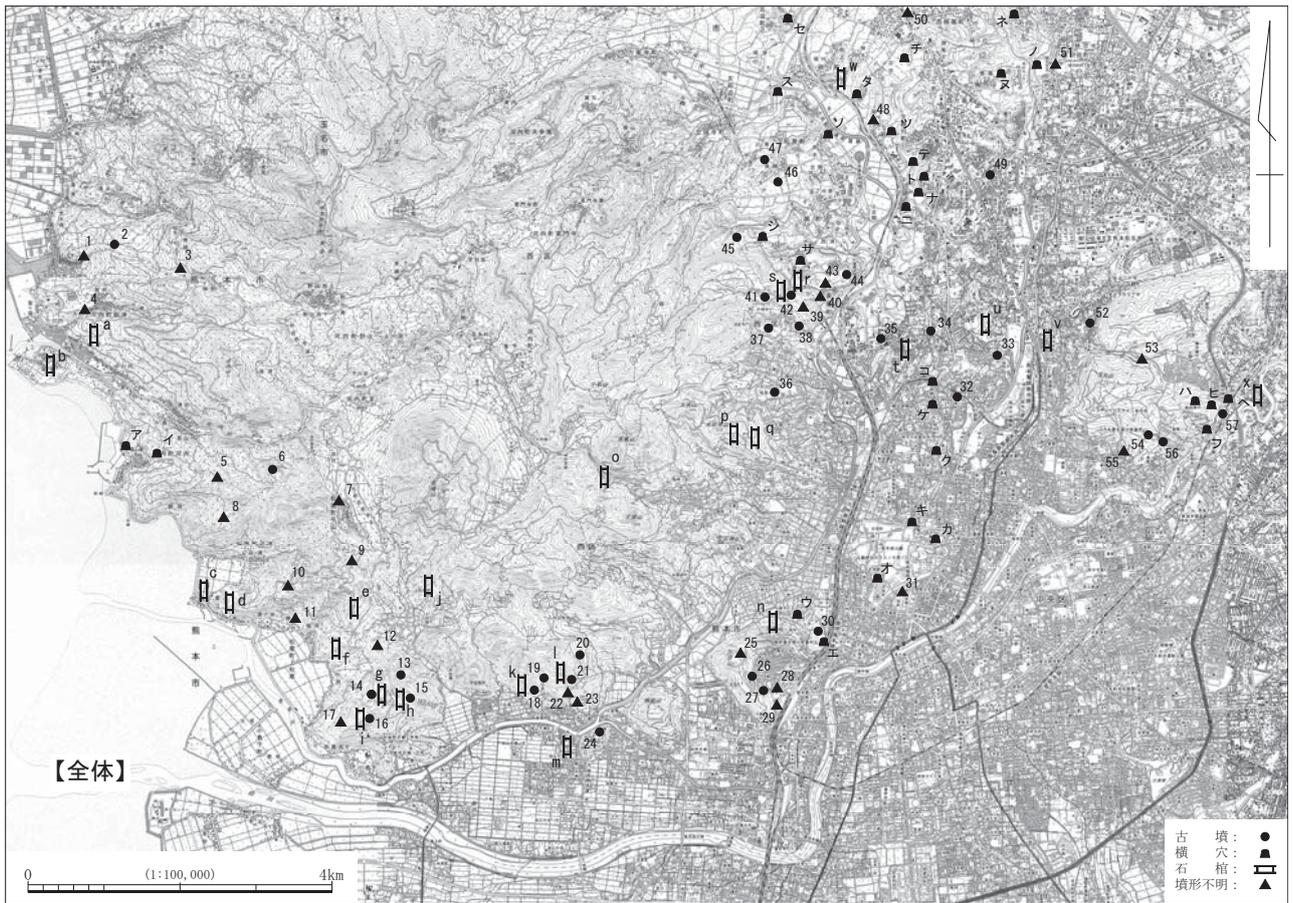
**金峰山南麓部** この地域は千金甲古墳群や檜崎山古墳群などといった遺跡が集中しており、多数の古墳や石棺が確認されている。前期に該当するものはなく、中期になると古墳の築造が開始され、千金甲1号墳や檜崎山5号墳、高城山2・3号墳といった古墳が出現する。特に檜崎山5号墳からは製作時期が5世紀中頃から後半と推定される挂甲(小札甲)が出土している。後期は千金甲古墳群と檜崎山古墳群が引き続き築造され古墳群の拡大が進められた。また本地域では、古墳と石棺は見られるものの、横穴は確認されていない。

**独立丘陵** 本地域では中期に至るまで古墳・横穴・石棺は見られない。後期以降になると、茶臼山では古城横穴群や千葉城横穴群といった大規模な横穴群が築造されている。花岡山・万日山には多数の古墳が確認されていたが、現在はほとんど消滅している。城山周辺では横穴は確認されていない。

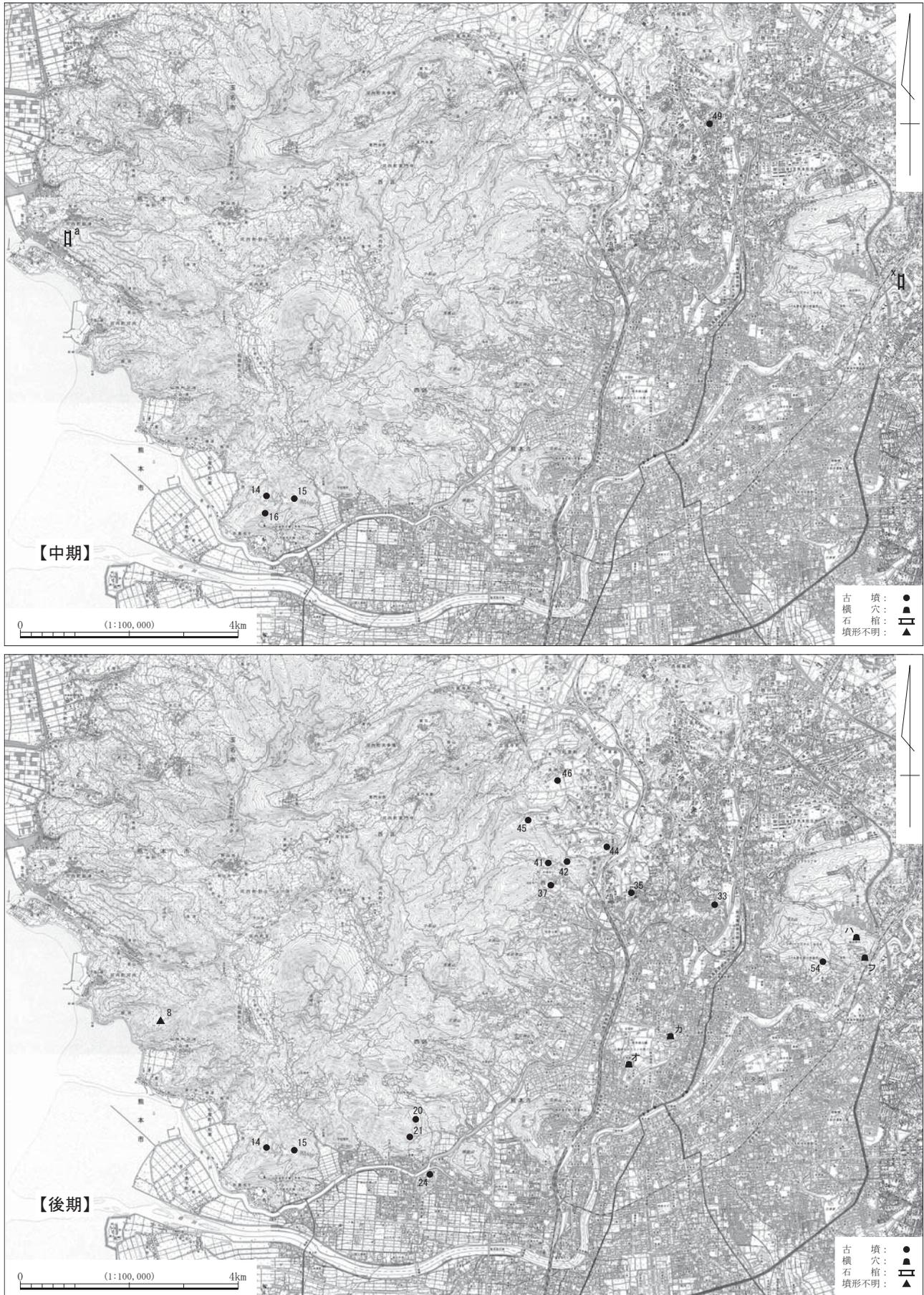
**井芹川・坪井川両岸の台地上面および丘陵** 本地域では、古墳は井芹川右岸に、横穴は井芹川左岸に集中する傾向が見られる。前期に遺跡は見られず、中期は羽山塚古墳のみが確認されている。直径40m以上の大型円墳であり、首長墓に該当すると考えられる。後期には井芹川水系で釜尾古墳、坪井川水系で稲荷山古墳がそれぞれの地域における首長墓として築造されている。どちらの古墳も集成編年9期にあたる装飾古墳である。

- 金峰山・立田山の古墳** 熊本平野北部全体を通しての古墳分布の特徴は以下の4点に集約できる。
- ・築造時期は古墳時代後期～終末期に集中している。
  - ・古墳、横穴、石棺の分布傾向はどれも似通うが、横穴は金峰山南麓と城山周辺、石棺は茶臼山周辺の地域では確認されていない。
  - ・前期に属する古墳は見られない。
  - ・富ノ尾3号墳は小型の前方後円墳であったとされるが、実態は不明である。これ以外は首長墓を含めてすべて円墳である。

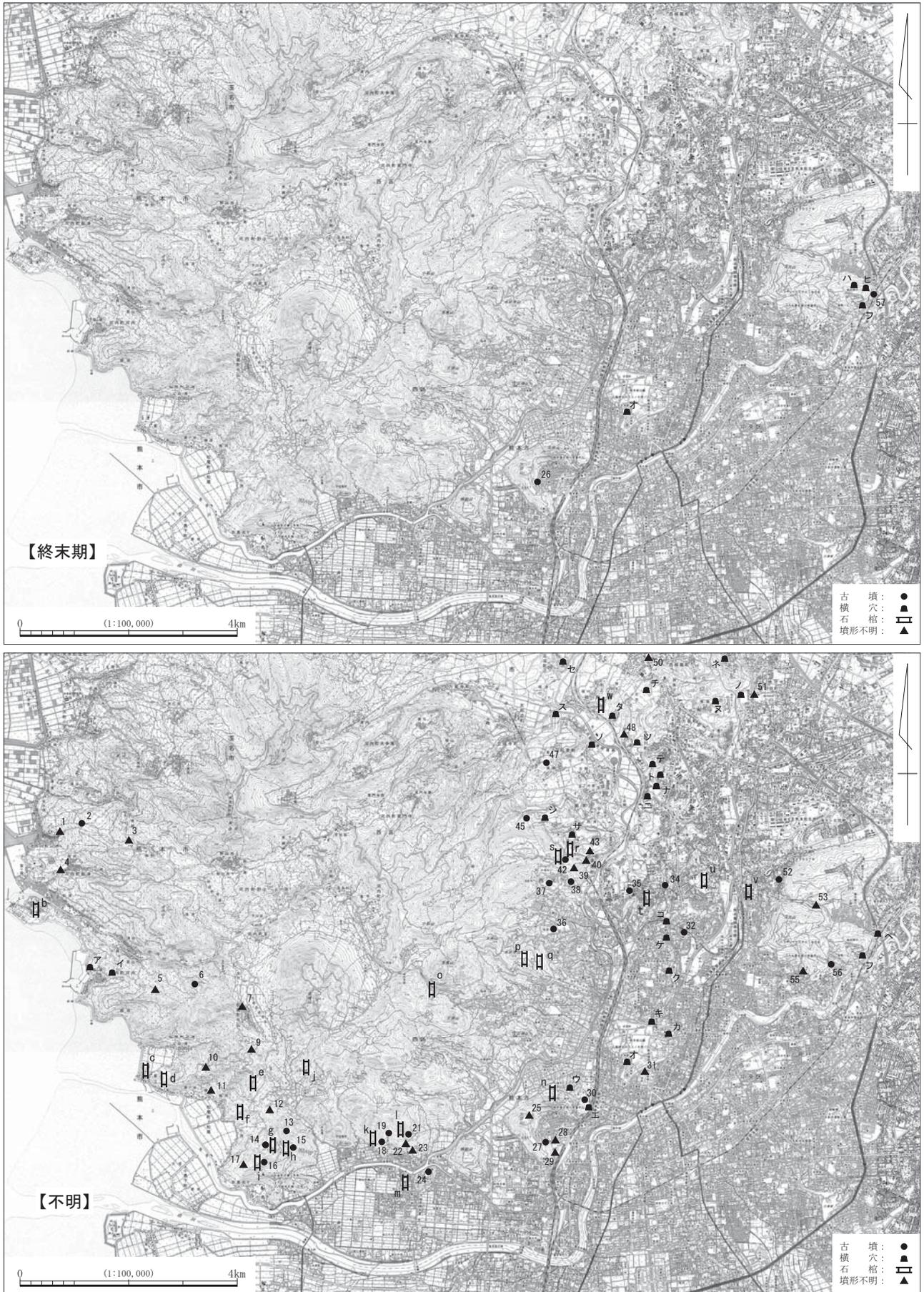
これらは旧来の熊本平野北部における古墳分布の見解と相違ない。しかし、今回の検討では金峰山・立田山周辺の古墳分布の変遷について十分な検討ができたとは言い難い。その最たる理由の一つは基礎的な情報不足である。分布図を見ても明らかなように、時期が不明とされる遺跡が多数見受けられる。熊本市内には未調査・未確認の遺跡が数多くあり、詳細不明なものも少なくない。今後さらなる調査が行われれば、より核心に迫る検討が可能になるだろう。(内門)



第2図 金峰山・立田山における古墳分布図(1)



第3図 金峰山・立田山における古墳分布図(2)



第4図 金峰山・立田山における古墳分布図(3)

第1表 金峰山・立田山における古墳一覧表(1)

古墳

№	①遺跡名	②所在地	③墳形	④規模(m)	⑤埋葬施設	⑥時期	⑦装飾	⑧現存	⑨備考	⑩文献
1	丸尾山古墳	熊本市西区河内町白浜								25
2	差茂塚1号	熊本市西区河内町白浜	円墳?		横穴式石室(複室)				封土を失い石室が露出	12・22
2	差茂塚2号	熊本市西区河内町白浜	円墳?					△	側壁の一部のみ残存	12・22
3	水谷古墳	熊本市西区河内町白浜								12
4	塚山古墳	熊本市西区河内町船津								25
5	鬼塚古墳	熊本市西区河内町						×	消滅	22
6	五分ノ木古墳	熊本市西区河内町	円墳?		割石小口積石室			×	消滅	22
7	上松尾古墳	熊本市西区松尾町平山								25
8	塩屋北の崎1号	熊本市西区河内町			横穴式石室(単室)	6世紀後半			盗掘の痕跡有	12・22
8	塩屋北の崎2号	熊本市西区河内町	円墳?		横穴式石室(単室)	後期前～中				12・22
9	大山古墳	熊本市西区河内町								29
10	峠古墳群	熊本市西区松尾町近津								29
11	梅洞古墳	熊本市西区西松尾町								29
12	上松尾曾谷古墳群	熊本市西区西松尾町								29
13	権現平1号	熊本市西区小島	円墳	6					羨門の露出を確認	4・12・23
13	権現平2号	熊本市西区小島	円墳							4・12・23
14	千金甲1号	熊本市西区小島	円墳	12	横穴式石室(単室)	8期	○			4・12・23
14	千金甲2号	熊本市西区小島	円墳	11.5	横穴式石室(単室)	10期	△			4・12・23
14	千金甲3号	熊本市西区小島	円墳	15	横穴式石室(単室)	10期	○		現在は保護屋が設置	4・12・23
14	千金甲5号	熊本市西区小島	円墳		横穴式石室(単室)	10期	×			4・12・23
15	楢崎山1号	熊本市西区小島			横穴式石室?			×	果樹園の開墾に伴い消滅	4・12・23
15	楢崎山2号	熊本市西区小島	円墳?	8.2	横穴式石室?					4・23
15	楢崎山3号	熊本市西区小島						×	現在は果樹園	4・23
15	楢崎山4号	熊本市西区小島	円墳?	26?	箱式石棺?				現在は果樹園	4・23
15	楢崎山5号	熊本市西区小島	円墳	17	横穴式石室(単室)	5世紀後半	×		挂甲が出土	4・12・23
15	楢崎山6号	熊本市西区小島	円墳	15	横穴式石室?					4・23
15	楢崎山7号	熊本市西区小島	円墳	15	横穴式石室(単室)	10期	×			4・12・23
15	楢崎山8号	熊本市西区小島	円墳	7	横穴式石室?					4・23
15	楢崎山9号	熊本市西区小島	円墳	5						4・23
15	楢崎山10号	熊本市西区小島			横穴式石室?					4・23
16	高城山2号	熊本市西区小島	円墳	11		中期?	×			4・23
16	高城山3号	熊本市西区小島	円墳	15	舟形石棺・箱式石棺	中期?	×			4・23
16	高城山6号	熊本市西区小島	円墳					×	横穴式石室石材が露出	4・12・23
16	高城山7号	熊本市西区小島	円墳	5						4・23
16	高城山8号	熊本市西区小島	円墳	15						4・12
16	高城山10号	熊本市西区小島				後期中葉?			横穴式石室の側壁部残存	4・14
17	百貫古墳群	熊本市西区西松尾町								29
18	二本松1号	熊本市西区上高橋	円墳	11	横穴式石室		×			4・12・23
18	二本松2号	熊本市西区上高橋					×		半壊の横穴式石室が露出	4・12・23
18	二本松3号	熊本市西区上高橋								4・23
18	二本松4号	熊本市西区上高橋	円墳	8						4・23
18	二本松5号	熊本市西区上高橋	円墳	15						4・23
19	皆代古墳	熊本市西区上高橋	円墳		横穴式石室(単室)					12
20	二軒小屋古墳	熊本市西区池上町	円墳	15	横穴式石室(単室)	10期	×			4・9・12・23
21	小松山1号	熊本市西区上高橋	円墳	15	横穴式石室(単室)	9期	×		1号と2号を除き消滅	4・9・12・23
21	小松山2号	熊本市西区上高橋			箱式石棺		×	△	所在不明	4・23
22	堂ノ園1号墳	熊本市西区上高橋							墳丘の有無は不明	4
23	高坊古墳	熊本市西区上高橋			横穴式石室		×	○	石屋形のみ残存	12・22
24	城山一の塚古墳	熊本市西区上代	円墳	32～35						4・23
24	城山二の塚古墳	熊本市西区上代	円墳	17.5～23	横穴式石室?					4・23
24	城山三の塚古墳	熊本市西区上代	円墳	20	横穴式石室(単室)	10期	×		消滅	4・12・23
25	万日山山頂古墳	熊本市西区春日			横穴式石室			×	消滅	4・12・23
26	万日山古墳	熊本市西区春日	円墳	18	横穴式石室(複室)	10期	×		畿内型の石棺を有する	4・12・23
27	万日山古墳参考地	熊本市西区春日	円墳							4
28	万日山東古墳	熊本市西区春日			長持型の石櫛?			×	消滅	4・23
29	万日古墳	熊本市西区春日			横穴式石室			×	消滅	12・23
30	北岡神社境内古墳	熊本市西区春日	円墳						鏡、鉄器類が出土	4

第2表 金峰山・立田山における古墳一覧表(2)

No.	①遺跡名		③墳形	④規模(m)		⑤埋葬施設	⑥時期	⑦装飾	⑧現存	⑨備考	⑩文献
	所在地	号数		奥行	幅						
31	山崎古墳	熊本市中央区桜町				板石による石室墳			×		7
32	舟場山古墳	熊本市北区津浦町	円墳						×	整地作業で消滅	5
33	稲荷山古墳	熊本市北区打越町	円墳	30		横穴式石室(単室)	9期	○			12・13・16・23
34	長迫古墳	熊本市北区池田	円墳						△	所在不明	5・12
35	富ノ尾1号	熊本市北区池田	円墳	15		横穴式石室(単室)	6世紀前半	○		1号墳のみ残存	5・12・23
35	富ノ尾2号	熊本市北区池田	円墳						×	消滅	5・12・15・23
35	富ノ尾3号	熊本市北区池田	前方後円?	30		横穴式石室?			×	宅地造成のため消滅	5・23
36	経塚1号	熊本市西区花園	円墳	10					×	宅地造成のため半分消滅	4・12
36	経塚2号	熊本市西区花園	円墳	7					×		4・12
37	畑の原1号	熊本市西区花園	円墳			横穴式石室(単室)	10期	×			4・12
37	畑の原2号	熊本市西区花園							×	未調査のまま道路下へ埋没	4・23
37	畑の原3号	熊本市西区花園									4・23
38	羽山古墳	熊本市西区花園	円墳	30							25
39	柿原堂手古墳	熊本市西区花園									25
40	常福寺古墳	熊本市北区釜尾町									31・32
41	天福寺裏山1号	熊本市西区花園	円墳	10		横穴式石室(単室)	10期	△		奥壁に線刻を確認	4・9・12・23
41	天福寺裏山2号	熊本市西区花園	円墳	10		横穴式石室(単室)	10期	×			4・9・12・23
41	天福寺裏山3号	熊本市西区花園	円墳	10		横穴式石室(単室)	10期	×		有装飾とされるが誤認か	9・12・23
42	釜尾堂出古墳	熊本市北区釜尾町	円墳	5~7		横穴式石室?	10期	×		一部凝灰岩の巨石が露出	4・12
43	橋口古墳	熊本市北区釜尾町							×	赤色顔料を塗った石材を確認	19
44	釜尾古墳	熊本市北区釜尾町	円墳	30超		横穴式石室(複室)	9期	○		熊本地震で石室や盛土が損傷	12・15・23・30
45	小塚古墳1号	熊本市北区貢町	円墳	12		横穴式石室			△	墳丘測量のみ行われている	21
45	小塚古墳2号	熊本市北区貢町	円墳	20前後		横穴式石室	6世紀後半	×	△	長軸約19m、短軸16.5mの楕円形	21
45	小塚古墳3号	熊本市北区貢町	円墳	20超		横穴式石室	TK10~MT85期	×	△		21
46	大塚原古墳	熊本市北区貢町	円墳	6			6世紀後半				19・23・24
47	迫畑古墳	熊本市北区和泉町	円墳	2						古墳であるかどうか定かでない	19
48	鶴畑古墳参考地	熊本市北区下硯川町									25
49	羽山塚古墳	熊本市北区飛田	円墳	39~41		横穴式石室?	5世紀前半			外径約54.5mの周溝を確認	19・23・24
50	一丁畑古墳	熊本市北区西梶尾町									25
51	鶴羽田かぶと塚古墳	熊本市北区鶴羽田		4							19
52	万石塚坊主古墳群	熊本市北区清水万石	円墳	3.4~4					△	1基のみ現存	5
53	万石茶山古墳群	熊本市北区室園町				横穴式石室					7
54	立田山南麓古墳(上)	熊本市中央区黒髪	円墳	11		横穴式石室(単室)	10期	×			5・12・23
54	立田山南麓古墳(下)	熊本市中央区黒髪				横穴式石室(単室)	10期	×	×		5・12・23
55	白石古墳	熊本市中央区黒髪								須恵器が出土	5
55	城床古墳群	熊本市中央区黒髪									5
56	宇留毛神社古墳1	熊本市中央区黒髪	円墳	20.5~24		横穴式石室?			×	盗掘坑のみ確認	5・12・23
56	宇留毛神社古墳2	熊本市中央区黒髪	円墳	19~21		横穴式石室?			×	盗掘坑のみ確認	5・12・23
57	長薫寺古墳	熊本市中央区黒髪	円墳	18		横穴式石室?	7世紀前半	×	×		5・12・23

## 横穴

No.	①遺跡名		②所在地	③規模(m)		④時期	⑤装飾	⑥現存	⑦備考	⑧文献
	横穴群	号数		奥行	幅					
ア	塩屋横穴群		熊本市西区河内町							11・33
イ	迫横穴群		熊本市西区河内町							11・33
ウ	吉祥寺横穴群	1号	熊本市中央区横手							6・11・33
ウ		2号	熊本市中央区横手					△	2号はほぼ埋没	6・11・33
エ	北岡横穴群	墓室01	熊本市西区春日						14基の横穴墓を確認	10・24
エ		墓室02	熊本市西区春日	削平	2.55					24
エ		墓室03	熊本市西区春日							24
エ		墓室04	熊本市西区春日							24
エ		墓室05	熊本市西区春日						横穴ではない?	24
エ		墓室06	熊本市西区春日	削平	3.57					24
エ		墓室10	熊本市西区春日	削平						24
エ		墓室11	熊本市西区春日	削平						24
エ		墓室12	熊本市西区春日	削平						24
エ		墓室13	熊本市西区春日	削平						24
エ		墓室14	熊本市西区春日	1.97	1.51					24

第3表 金峰山・立田山における古墳一覧表(3)

No.	①遺跡名		②所在地	③規模(m)		④時期	⑤装飾	⑥現存	⑦備考	⑧文献
	横穴群	号数		奥行	幅					
エ		墓室15	熊本市西区春日	2.42	2.26					24
エ		墓室16	熊本市西区春日							24
エ		墓室17	熊本市西区春日							24
エ		墓室18	熊本市西区春日							24
エ		墓室19	熊本市西区春日	2.78	削平					24
エ		墓室20	熊本市西区春日	3.52	3.03					24
エ		墓室21	熊本市西区春日	削平						24
エ		墓室22	熊本市西区春日	2.88	2.63					24
オ	古城横穴墓群	1号	熊本市中央区古城町	2.10	2.15			△		5
オ		2号	熊本市中央区古城町	2.75	2.10			△		5・17
オ		3号	熊本市中央区古城町	2.30	2.40					5・13・17
オ		4号	熊本市中央区古城町	1.55	1.30					5・13・17
オ		5号	熊本市中央区古城町	3.50	2.85					5・13・17
オ		6号	熊本市中央区古城町	3.20	2.80					5・13・17
オ		7号	熊本市中央区古城町	3.52	3.03			△		5・13・17
オ		8号	熊本市中央区古城町	3.27	2.55			△		5・13・17
オ		9号	熊本市中央区古城町	2.16	2.06			×		5・13・17
オ		10号	熊本市中央区古城町	3.27	3.15					5・13・17
オ		11号	熊本市中央区古城町	2.45	2.55			×		5
オ		12号	熊本市中央区古城町	2.60	2.20			△		5
オ		13号	熊本市中央区古城町					×		5・13・17
オ		14号	熊本市中央区古城町					×		5・13・17
オ		15号	熊本市中央区古城町					×		5・13・17
オ		16号	熊本市中央区古城町	3.09	2.73					5・13・17
オ		17号	熊本市中央区古城町	3.52	4.00			△		5・13・17
オ		18-1号	熊本市中央区古城町	2.95	2.80					5・13・17
オ		18-2号	熊本市中央区古城町	1.30	1.40					5・13・17
オ		19号	熊本市中央区古城町	2.20	1.80			△		5・13・17
オ		20号	熊本市中央区古城町	3.33	2.36				複室構造	5・13・17
オ		21号	熊本市中央区古城町	2.97	2.30	7世紀		△		5・13・17
オ		22号	熊本市中央区古城町	2.05	1.75			△		5・13・17
オ		23号	熊本市中央区古城町	1.36	2.28			△		5・13・17
オ		24号	熊本市中央区古城町	0.35	1.85			△		5・13・17
オ		25号	熊本市中央区古城町							5・13・17
オ		26号	熊本市中央区古城町							5・13・17
オ		27号	熊本市中央区古城町							5・13・17
オ		28号	熊本市中央区古城町	1.19	2.11					5・13・17
オ		29号	熊本市中央区古城町	2.95	2.45					5・13・17
オ		30号	熊本市中央区古城町	2.20	2.40				玄室は3分の2程残存	5・13・17
オ		31-1号	熊本市中央区古城町	2.97	2.79					5・13・17
オ		31-2号	熊本市中央区古城町	0.60	1.26	7世紀後半				5・13・17
オ		32号	熊本市中央区古城町	2.40	3.40					5・13・17
オ		33号	熊本市中央区古城町	2.20	2.05					5・13・17
オ		34-1号	熊本市中央区古城町	2.35	2.10					5・13・17
オ		34-2号	熊本市中央区古城町	0.82	0.70			×		5・13・17
オ		35号	熊本市中央区古城町	2.35	2.30			×		5・13・17
オ		36号	熊本市中央区古城町	2.00	1.85					5・13・17
オ		37号	熊本市中央区古城町	2.20	2.20	7世紀				5・13・17
オ		38-1号	熊本市中央区古城町	2.10	1.75					5・13・17
オ		38-2号	熊本市中央区古城町	0.52	0.73					5・13・17
オ		39号	熊本市中央区古城町	2.60	2.40		○		閉塞石に火守(または火安)の刻字	5・13・17
オ		40号	熊本市中央区古城町	2.75	2.30					5・13・17
オ		41号	熊本市中央区古城町	2.20	2.25			△		5・13・17
オ		42号	熊本市中央区古城町	2.40	2.50			△		5・13・17
オ		43号	熊本市中央区古城町							5・13・17
オ		44号	熊本市中央区古城町					△		5・13・17
オ		45号	熊本市中央区古城町	2.90	2.90					5・13・17

第4表 金峰山・立田山における古墳一覧表(4)

No.	①遺跡名		②所在地	③規模 (m)		④時期	⑤装飾	⑥現存	⑦備考	⑧文献
	横穴群	号数		奥行	幅					
オ		46号	熊本市中央区古城町	3.50	3.93					5・13・17
オ		47号	熊本市中央区古城町	2.85	2.50					5・13・17
オ		48号	熊本市中央区古城町							5・13・17
オ		49号	熊本市中央区古城町		2.98					5・13・17
カ	千葉城横穴群	1号	熊本市中央区千葉城町	1.91	1.91	6世紀後半				5・13・24
カ		2号	熊本市中央区千葉城町	2.06	1.73	6世紀後半				5・13・24
カ		3号	熊本市中央区千葉城町	1.25	1.19	6世紀後半				5・13・24
カ		4号	熊本市中央区千葉城町	1.79	1.79	6世紀後半				5・13・24
カ		5号	熊本市中央区千葉城町	1.91	2.15	6世紀後半				5・13・24
カ		6号	熊本市中央区千葉城町	1.07	1.25	6世紀後半				5・13・24
カ		7号	熊本市中央区千葉城町			6世紀後半				5・13・24
カ		8号	熊本市中央区千葉城町	1.50	2.00	6世紀後半				5・13・24
カ		9号	熊本市中央区千葉城町	1.80	1.70	6世紀後半				5・13・24
カ		10号	熊本市中央区千葉城町		1.50	6世紀後半				5・13・24
キ	磐根橋際横穴群		熊本市中央区二の丸						4基確認	5・13・33
ク	寺原横穴群		熊本市西区稗田町							5・13・33
ケ	稗田横穴群		熊本市西区稗田町						5 + $\alpha$ 基確認	5・13・34
コ	津浦一ノ谷横穴群		熊本市西区出町						104基確認	5・13・34
サ	扇田横穴群	1号	熊本市北区貢町	0.40	0.35					5
サ		2号	熊本市北区貢町	1.35	0.95					13
サ		3号	熊本市北区貢町	2.24	2.05					13
サ		4号	熊本市北区貢町	1.85	1.65					13
サ		5号	熊本市北区貢町	1.71	1.15					13
サ		6号	熊本市北区貢町	1.71	1.42					13
サ		7号	熊本市北区貢町	2.29	2.51					13
シ	原口原横穴群	1号	熊本市北区貢町					○		13
シ		2号	熊本市北区貢町					○		13
シ		3号	熊本市北区貢町					○		13
ス	今熊横穴群		熊本市北区立福寺町					×	消滅	19
セ	北迫筒井横穴群		熊本市北区北迫町						13基以上の可能性有	19
ソ	崩平横穴群	1号	熊本市北区和泉町	1.88	2.12					13
ソ		2号	熊本市北区和泉町		2.20					13
タ	一丁畑横穴群		熊本市北区下硯川町					×	消滅	19
チ	六反畑横穴群		熊本市北区四方寄町					○	現在は1基を確認	19
ツ	豆尾横穴群		熊本市北区下硯川町						現在は1基を確認	13・33
テ	黒井横穴群		熊本市北区下硯川					○	現在は1基を確認	19
ト	坂下A横穴群		熊本市北区下硯川							33
ナ	坂下B横穴群		熊本市北区下硯川							33
ニ	狩衣横穴群		熊本市北区下硯川					○	現在は3基を確認	19
ヌ	辻横穴群		熊本市北区梶尾町					×		33
ネ	梶尾横穴群		熊本市北区梶尾町							13・33
ノ	竹の下横穴群		熊本市北区鶴羽田	2.93	2.64				坪井川に面して1基確認	19
ハ	浦山第2横穴群	1号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△	9基 + $\alpha$ 確認	13
ハ		5号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△		1・9・13・18
ハ		6号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△		1・9・13・18
ハ		7号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△		1・9・13・18
ハ		8号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△		1・9・13・18
ハ		9号	熊本市中央区黒髪			6世紀後半～7世紀前半		△		1・9・13・18
ヒ	浦山第1横穴群	A-1	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-2	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-3	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-4	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-5	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-6	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-7	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-8	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13
ヒ		A-9	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13

第5表 金峰山・立田山における古墳一覧表(5)

No.	①遺跡名		②所在地	③規模(m)		④時期	⑤装飾	⑥現存	⑦備考	⑧文献	
	横穴群	号数		奥行	幅						
ヒ		A-10	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-1	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-2	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-3	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-4	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半			羽子板状の前庭通路を有し小形横穴が群構築	3・13	
ヒ		B-5	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-6	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-7	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
ヒ		B-8	熊本市中央区黒髪			7世紀後半～8世紀前半				3・13	
フ	宇留毛小磯橋際横穴群	1号	熊本市中央区黒髪	2.36	2.22	6世紀末～7世紀前半		△		40基の大部分は消滅	5・13・23
フ		2号	熊本市中央区黒髪	2.70	2.36	6世紀末～7世紀前半		△			5・13・23
フ		3号	熊本市中央区黒髪	2.66	2.90	6世紀末～7世紀前半		△			5・13・23
フ		4号	熊本市中央区黒髪	3.10	2.66	6世紀末～7世紀前半		△		5・13・23	
フ		5号	熊本市中央区黒髪	3.30	3.10	6世紀末～7世紀前半		△	排水用の落とし溝を有する	5・13・23	
フ		6号	熊本市中央区黒髪	2.76	2.29	6世紀末～7世紀前半		△	羨道にヨモツヘグイの形跡有	5・13・23	
フ	つつじヶ丘横穴群	A群	熊本市中央区黒髪	1.60	2.30					5・13・29	
フ		B-1	熊本市中央区黒髪	1.94	1.61	6世紀後半～7世紀中頃		△	48基(調査数19基)を確認	5・13・30	
フ		B-2	熊本市中央区黒髪	0.60	1.50	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-1	熊本市中央区黒髪	2.61	2.73	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-2	熊本市中央区黒髪	1.58	1.72	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-3	熊本市中央区黒髪	2.06	1.45	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-4	熊本市中央区黒髪	1.94	1.64	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-5	熊本市中央区黒髪	2.36	2.22	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-6	熊本市中央区黒髪	1.18	1.82	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		C-7	熊本市中央区黒髪	1.88	1.82	6世紀後半～7世紀中頃		△	前庭部から多量の遺物が出土	5・13・29	
フ		C-8	熊本市中央区黒髪	1.45	1.58	6世紀後半～7世紀中頃		△	前庭部から多量の遺物が出土	5・13・29	
フ		D-1	熊本市中央区黒髪	2.75	2.94	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-2	熊本市中央区黒髪	2.61	2.62	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-3	熊本市中央区黒髪	3.02	2.58	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-4	熊本市中央区黒髪	2.01	1.97	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-5	熊本市中央区黒髪	1.73	0.80	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-6	熊本市中央区黒髪	0.37	0.29	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		D-7	熊本市中央区黒髪	1.33	1.61	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		J-1	熊本市中央区黒髪	2.52	2.12	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
フ		J-2	熊本市中央区黒髪	2.30	2.70	6世紀後半～7世紀中頃		△		5・13・29	
へ	女瀬平横穴群		熊本市北区龍田内	2.36	2.55			△	消滅	7・29	
へ	長薫寺横穴群	1号	熊本市中央区黒髪	2.09	2.55			△	消滅	7・29	
へ		2号	熊本市中央区黒髪	1.82	2.00			△		7・29	

石棺

No.	①遺跡名	②所在地	③基数	④規模(長さ×幅cm)	⑤埋葬施設	⑥時期	⑦装飾	⑧現存	⑨備考	⑩文献
a	夢の上石棺	熊本市西区河内町船津	1		箱式石棺	前期後～中期前				11・22
b	長崎鼻遺跡群(長崎鼻古墳)	熊本市西区河内町船津								11
c	松生島箱式石棺群	熊本市西区松尾町近津							舟形石棺有	34
d	近津園山箱式石棺群	熊本市西区松尾町近津								11
e	小林1号石棺(小林石棺群)	熊本市西区松尾町			石蓋土壙墓				北端を欠失	4
e	小林2号石棺(小林石棺群)	熊本市西区松尾町		170×55	箱式石棺			△	一部破壊	4・11・23
e	小林3号石棺(小林石棺群)	熊本市西区松尾町			箱式石棺			△	一部破壊	4・11・23
e	小林4号石棺(小林石棺群)	熊本市西区松尾町			箱式石棺			×	消滅	4・11・23
f	西竹洞1号石棺	熊本市西区西松尾町			箱式石棺					4・11
f	西竹洞2号石棺(千金甲古墳群)	熊本市西区西松尾町		210×60	箱式石棺				内部に赤色顔料有	4・11
g	千金甲4号石棺	熊本市西区小島			箱式石棺			×	円墳の可能性有	4・23
h	檜崎山古墳1号石棺(檜崎山古墳群)	熊本市西区小島		165×51					赤色顔料の形跡有	4・11
h	檜崎山古墳2号石棺(檜崎山古墳群)	熊本市西区小島								4・11
h	檜崎山古墳3号石棺(檜崎山古墳群)	熊本市西区小島							内部に赤色顔料有	4・11
i	高城山1号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23
i	高城山2号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23
i	高城山3号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23

第6表 金峰山・立田山における古墳一覧表(6)

No.	①遺跡名	②所在地	③基数	④規模 (長さ×幅cm)	⑤埋葬施設	⑥時期	⑦装飾	⑧現存	⑨備考	⑩文献
i	高城山4号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23
i	高城山5号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23
i	高城山6号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×	赤色顔料の形跡有	4・23
i	高城山7号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×	赤色顔料の形跡有	4・23
i	高城山8号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×		4・23
i	高城山9号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×		4・23
i	高城山10号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×		4・23
i	高城山11号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×		4・23
i	高城山12号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町			箱式石棺			×		4・23
i	高城山13号石棺(高城山古墳群)	熊本市西区小島下町						×		4・23
i	高城山5号土壙墓(参考遺跡)	熊本市西区小島							石積みを確認	4・23
j	松尾島石棺群	熊本市西区上松尾町								11
k	二本松1号石棺(二本松古墳群)	熊本市西区上高橋		180×60前後	箱式石棺			△	蓋石と側石の一部を消失	4・23
k	二本松2号石棺(二本松古墳群)	熊本市西区上高橋		180×60前後	箱式石棺				蓋石と側石の一部を消失	4・23
k	二本松3号石棺(二本松古墳群)	熊本市西区上高橋			箱式石棺			△	残骸のみ	4・23
k	二本松4号石棺(二本松古墳群)	熊本市西区上高橋			箱式石棺			△	残骸のみ	4・23
l	小松山2号石棺	熊本市西区上高橋			箱式石棺			△	所在不明	4・23
m	高橋稲荷石棺群	熊本市西区上代	3		箱式石棺				内行花文鏡出土	4・11・23
n	花岡山1号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山2号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山3号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山4号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山5号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山6号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手			箱式石棺					4・23
n	花岡山7号石棺(花岡山石棺群)	熊本市西区横手		201×44	箱式石棺				赤色顔料の形跡有	4・23
o	上荒尾箱式石棺群	熊本市西区島崎								2・11
p	本妙寺B箱式石棺群	熊本市西区島崎								34
q	本妙寺A箱式石棺	熊本市西区花園		172×38	箱式石棺				赤色顔料の形跡有	11
r	堂手石棺群1号石棺	熊本市北区釜尾町		360×80	箱式石棺					11・19・23
r	堂手石棺群2号石棺	熊本市北区釜尾町		335×80	箱式石棺					11・19・24
s	釜尾堂出土石棺	熊本市北区釜尾町	10基以上		箱式石棺			△	赤色顔料の形跡有	11・19・25
t	竹ノ上石棺(電通学園古墳)	熊本市北区津浦町	1		箱式石棺				箱式石棺の可能性有	11・19・26
u	高平箱式石棺	熊本市北区高平								11
v	松崎八幡石棺	熊本市北区清水本町		188×53	箱式石棺				内部に赤色顔料の形跡有	5・11
w	柚ノ木石棺群(柚の木石棺)	熊本市北区硯川町	複数		箱式石棺			△	敷基の箱式石棺を確認	5・11
x	中牧鶴石棺	熊本市北区龍田	1	130×75	箱式石棺	古墳中期				5・11・23

※横穴の規模に関しては、各報告により計測方法が異なるため、今回は玄門から奥壁突き当りまでの長さを奥行、奥行に直行する長さを幅として再計測した。

※装飾の有無は、各文献の記述を基に行った。装飾をもつという記述があるものには○、無いものには×、装飾の可能性のあるものには△、特に記述の無いものは空欄とした。

※現存の判断は、各文献の記述を基に行った。明確に現存・消滅の記述があるものには○・×を、一部破壊などの記述があるものには△を、特に記述の無いものは空欄とした。

第1～6表に関する参考文献

- 1 稲津暢洋 2000「浦山第2横穴群第2次調査」『熊本市埋蔵文化財調査年報 第3号』熊本市教育委員会 p. 88
- 2 岩崎充宏編 1990『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団
- 3 上野辰男 1967「熊本市浦山横穴群」『考古学雑誌』第53巻第3号 日本考古学会 pp. 32-48
- 4 乙益重隆ほか編 1969『熊本市西山地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 5 乙益重隆ほか編 1971『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 6 乙益重隆ほか編 1978『熊本市中央南地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 7 乙益重隆ほか編 1980『熊本市中央北地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 8 隈昭志・桑原憲彰編 1979『羽山塚古墳調査報告書』九州産業交通株式会社
- 9 藏富士寛編 1997「肥後における古墳の調査2」『考古学研究室報告』第33集 熊本大学文学部考古学研究室 pp. 1-26
- 10 後藤克博編 2013『北岡横穴群』熊本県文化財調査報告 第290集 熊本県教育委員会
- 11 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本古墳時代共同研究グループ pp. 125-156
- 12 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会編 1999『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 13 第4回九州前方後円墳研究会実行委員会編 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 14 第11回九州前方後円墳研究会実行委員会編 2008『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 15 第20回九州前方後円墳研究会実行委員会編 2017『平成28年熊本地震による被災古墳の現状と課題』第20回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会
- 16 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告 第68集 熊本県教育委員会
- 17 高木正文ほか編 1985『古城横穴墓群』熊本県文化財調査報告 第74集 熊本県教育委員会
- 18 富田紘一編 1979『昭和53年度熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 19 富田紘一 1979「北部町の古墳時代」『北部町史』北部町 pp. 85-129
- 20 濱田耕作・梅原末治編 1917『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第一冊 京都帝国大学
- 21 林田和人・三好栄太郎編 2018『小塚遺跡1』熊本市の文化財 第73集 熊本市教育委員会
- 22 原口長之 1991「河内町の古墳」『河内町史』通史編・上 河内町 pp. 297-307
- 23 網田龍生・松本健郎・美濃口雅朗 1996「古墳時代」『新熊本市史』史料編 第1巻 熊本市 pp. 507-736
- 24 松本健郎 1998「古墳時代」『新熊本市史』通史編 第1巻 自然 原始・古代 熊本市 pp. 605-758
- 25 美濃口雅朗編 1994『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅰ』熊本市教育委員会
- 26 美濃口雅朗編 1995『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅱ』熊本市教育委員会
- 27 美濃口雅朗編 1997『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅲ』熊本市教育委員会
- 28 美濃口雅朗編 2000『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅳ』熊本市教育委員会
- 29 美濃口雅朗編 2002『つつじヶ丘横穴群 一発掘調査報告書一』熊本市教育委員会
- 30 三好栄太郎 2020「史跡釜尾古墳 平成30年度調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報 第22号』熊本市の文化財 第90集 熊本市教育委員会 pp. 56-59
- 31 村崎孝宏編 2015『飛田遺跡群1』熊本県文化財調査報告 第315集 熊本県教育委員会
- 32 山下義満編 2015『桑鶴遺跡群・五丁中原遺跡』熊本県文化財調査報告 第308集 熊本県教育委員会
- 33 「熊本県遺跡地図」熊本県・市町村共同 行政情報インターネット地図公開システム (<https://www2.wagmap.jp/portal-kumamoto/>)
- 34 「熊本市遺跡地図」熊本市地図情報サービス ([https://www.sonicweb-asp.jp/kumamoto/map?theme=th\\_50](https://www.sonicweb-asp.jp/kumamoto/map?theme=th_50))

## 二 調査経過

### 1. 過去の調査（第1次調査）

**古墳の発見** 立田山南麓古墳(上)は、熊本市中央区黒髪8丁目222-5番地および226番地に所在する。本古墳は1955年の立田山登山道路の開設工事に伴い発見され、その一報を受けた東光彦氏、平岡勝昭氏、乙益重隆氏によって緊急調査が行われた。その結果、本古墳は横穴式石室を主体部とする直径11m、高さ3.75mの円墳であることが判明した。石室全長は3.8m、そのうち玄室長は2.26m、幅は1.96m、側壁残存高は1.6mであった。調査時、既に盗掘されていたものの、石室内からは鉄鏃、鏢、金環、刀片、刀子片、須恵器の坏片、金銅の薄片などが検出された。さらに、玄門の左袖石と羨道左側壁にはさまれたコーナー部から、須恵器の横瓶1点、坏蓋・坏身を計5点重ね合わせたもの、ならびに壁に立てかけられた状態の鉄鏃12点が出土した。これらの遺物は「おそらく墓前祭祀に供した後、片隅に取片ずけた」ものであったと考察されている〔乙益 1971:p.152〕。

調査当時、本古墳の南にはせまい小道があり、その先には東洋繊維株式会社（以下、東洋繊維とする）の所有する立田山農場があった。立田山南麓古墳(下)は、1947年の東洋繊維ラミー（苧麻）畑開墾作業中に発見された。この古墳からも鉄鏃数点と須恵器片が出土した。

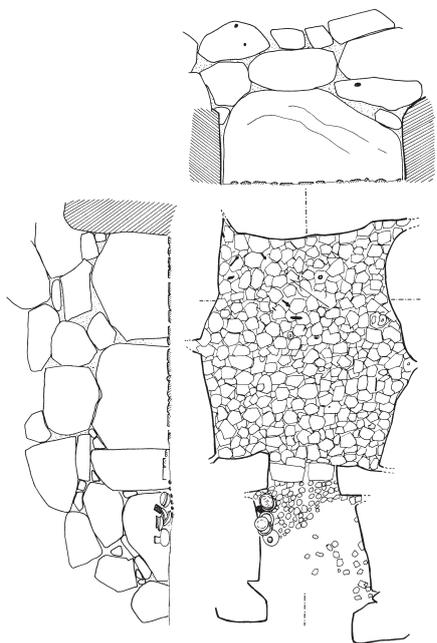
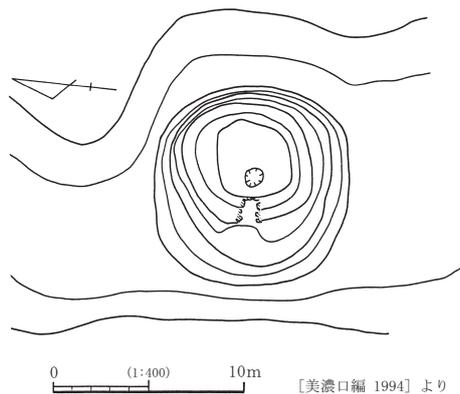
**第1次調査報告における誤りと今後に残された課題** 上記の通り、立田山南麓古墳(上)の調査は1955年に行われているが、以下ではそれを第1次調査とする。そして、2020年度に行った今回の調査を第2次調査とする。第1次調査の成果は『熊本市北部地区文化財調査報告書』および『新熊本市史』史料編第1巻のなかで報告されているが〔乙益 1971、松本 1996〕、それらにはいくつかの誤りおよび今後に残された課題がある。

第一の誤りは、『新熊本市史』に、立田山南麓古墳(上)は「応急調査の後消滅した」と記されていることである〔松本 1996 : p.706〕。本古墳は後述するように現存している。

第二の誤りは、両報告に掲載された石室実測図のスケールバーに付された数値が間違っていることである。いずれの報告においても本来の石室規模の2倍になる数値が付されている。したがって、『熊



第5図 立田山南麓古墳(上)の位置



第6図 1955年調査の墳丘測量図および横穴式石室実測図

本市北部地区文化財調査報告書』では3mとされているところを1.5mに、『新熊本市史』では2mとされているところを1mに訂正すれば、石室の正しい大きさが示されることになる。第6図は数値をそのように訂正したうえで石室実測図を引用した。

さて、今後に残された課題は第1次調査出土遺物が資料化されていないことである。今回、その所在を確認したところ、立田山南麓古墳(上)から出土した遺物は、熊本市立熊本博物館に「宇留毛横穴式石室墳」出土品として収蔵されていることが判明した。今後はそれらの遺物の図化を行い、公表していく必要があるだろう。

なお、立田山南麓古墳(上)の墳丘測量図は『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅰ』[美濃口編 1994]に掲載されている。しかし、この図から周辺地形を読み取ることは難しい。そのため、今回の第2次調査では古墳の墳丘およびその周辺地形を測量することにした。

**立田山の歴史と現在に至るまでの変遷** 立田山南麓古墳(上)が所在する立田山は「戦前まではすべて元肥後藩主細川家の所有となっていたものが、戦後は東洋繊維株式会社の山林となり、また一部は地元開拓農協等の手に渡っていた」という[豊島 1977 : p. 131]。戦後に立田山を細川家から買収した東洋繊維(現：トスコ株式会社)は、森林伐採、道路建設、<sup>ほじょう</sup>圃場開墾などを行い、1947年に36万坪にも及ぶ立田山農場を開設した[東洋繊維 1968]。

これらの戦後の開発に加えて、戦時中においても様々な物資の供給のために立田山の森林は利用された。その結果、細川家が所有していた頃の豊かな森林は失われた。このことは1948年米軍撮影の航空写真からもうかがえる(図版1-1)。

さらに、1950年代に入ると、立田山登山道路の整備に伴い、乗用車の乗り入れが激増し、これはのちにゴミの不法投棄や山火事などの社会問題を誘発した。

このような状況を憂慮した黒髪校区の住民は、1960年に「立田山を守る会」という自然保護団体を設立し、幾度となく立田山の危機を救っていた。特に、宅地開発を防ぐために行われた1960年代の保存運動は、熊本市民の間にも波及し、のちに市民運動へと発展した。このような県民および市民の声に応える形で、熊本県と熊本市は1974年に立田山を公有地化して保全することを決定した。以後、22年の歳月をかけて「立田山憩の森」は整備され、現在に至っている。

「立田山憩の森」以外にも現在の立田山には「立田自然公園」(泰勝寺跡)および「立田山野外保育センター 雑草の森」などの施設が存在している。このように、立田山は熊本市内における重要な緑地を構成すると同時に、市民の憩いの場としても大きな役割を果たしている。(松本健)

## 2. 今回の調査（第2次調査）

**調査に至る経緯** 2019年12月、中国武漢市で初めて確認された新型コロナウイルス感染症は世界各地に拡散し、1年が過ぎた2020年12月のいまでも、その世界的大流行は収まる気配をみせていない。日本人の日常生活にコロナ禍の顕著な影響が及び始めたのは2020年2月下旬で、人と人との濃厚な接触、すなわち3密を避けることが強く推奨される事態となった。そのため、熊本大学では卒業式や入学式が中止となり、我が考古学研究室でも木下尚子先生の退任記念行事の開催を断念した。

さまざまな社会活動が制限されるそうした情勢をみて、夏休みに予定している考古学発掘調査実習をどうすべきか、3月に入った頃から頭を悩ませるようになった。阿蘇市平原古墳群での発掘調査実習を2019年度に再開し、2020年度も継続して実施する計画であったが、地元の山田公民館をお借りしての合宿生活において3密を避けることはきわめて困難であると判断されたからである。また、無症状の感染者であるかもしれない若い学生たちが大挙して押しかけることもはばかられた。ご高齢の方が多い地元の方々にご心配、ご迷惑をおかけすることは何としても避けなければならなかった。

とはいえ、発掘調査実習は考古学教育の根幹をなすものである。直前に中止せざるを得なくなるかもしれないが、できうる限りの可能性を探り、発掘調査の実施に向けての準備だけは着実に進めておこうと考えた。なぜなら、中止の判断はいつでもできるが、発掘調査の実施にはさまざまな事前の手続きが必要なため、思い立ってすぐに調査を実施することは不可能であるからだ。

そこで、3密となる合宿ではなく、自宅からの通いで実施できるフィールドとして、熊本大学黒髪キャンパスのすぐ東にある立田山に焦点を絞り、3月中旬から遺跡地図を頼りにそこに分布する遺跡の現状調査を開始した。その結果、『新熊本市史』史料編第1巻では「消滅した」[松本 1996 : p. 706]とされる立田山南麓古墳(上)が残存していることを認めた。そして、熊本市文化創造部文化財課にも相談しつつ、その墳丘調査が不十分であることから、これを調査対象の第1候補と定めた。

立田山南麓古墳(上)が位置する山林は、森林法に定める保安林となっている。また、そこは県立自然公園条例に定める金峰山県立自然公園特別地域内でもある。そのため、熊本県教育庁文化課および熊本市文化創造部文化財課の指導を受けつつ、保安林（保安施設地区）内における作業許可、および自然公園特別地域内における土地の形状変更の許可を得た。そして、文化財保護法上の届出を含め、すべての法的手続きが完了したのは8月上旬のことであった。

**今回の調査** 発掘調査の開始に先立ち、2020年8月13日、立田山南麓古墳(上)の近くにまでレベル高を運ぶ水準測量を行った。既知点は、国土交通省が熊本市中央区黒髪5丁目の道路に設置した街区基準点の補助点4B130（補正後標高26.3447m）である。なお、調査地に設置した測量基準点の現場座標を国土座標に変換する際にも、この4B130および隣接する補助点4B131を用いた。



第7図 第2・第3トレンチ調査風景



第8図 オンライン現地説明会風景

第7表 立田山南麓古墳(上)基準点の現場座標

点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
T1	0.000	0.000	59.360	黄プラ杭大 (墳丘頂部)
T2	-7.040	0.000	57.444	黄プラ杭小 (石室南側)
T3	3.224	0.000	58.494	金属鈺 (道路)
T4	6.142	0.000	58.396	金属鈺 (道路)
T5	-6.767	8.632	57.154	黄プラ杭小
T6	-4.987	-9.248	56.544	黄プラ杭小
T7	-14.340	0.000	54.818	黄プラ杭小
T8	-14.386	-9.280	54.647	黄プラ杭小
T9	-20.931	7.964	54.006	黄プラ杭小
T10	6.482	15.195	60.069	黄プラ杭小
T11	-12.389	22.481	55.515	撤去
T12	-17.408	-17.481	52.385	撤去
TA13	6.531	1.453	58.532	金属鈺 (道路)
SfM1	-5.583	-6.170	56.329	1Tr. 北側 撤去
SfM2	-6.825	-5.324	56.207	1Tr. 南側 撤去
1a	-7.656	-7.656		1Tr. 下方 撤去
1b	-4.192	-2.960		1Tr. 上方 撤去
2a	-8.738	8.103		2Tr. 下方 撤去
2b	-4.498	3.548		2Tr. 上方 撤去
3a	-4.404	9.774		3Tr. 下方 撤去
3b	-2.645	3.698		3Tr. 上方 撤去

第8表 立田山南麓古墳(上)基準点の国土座標

点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
T1	-19860.657	-24501.203	59.360	黄プラ杭大 (墳丘頂部)
T2	-19866.237	-24505.496	57.444	黄プラ杭小 (石室南側)
T3	-19858.102	-24499.237	58.494	金属鈺 (道路)
T4	-19855.789	-24497.458	58.396	金属鈺 (道路)
T5	-19871.284	-24498.488	57.154	黄プラ杭小
T6	-19858.970	-24511.574	56.544	黄プラ杭小
T7	-19872.023	-24509.948	54.818	黄プラ杭小
T8	-19866.401	-24517.331	54.647	黄プラ杭小
T9	-19882.104	-24507.654	54.006	黄プラ杭小
T10	-19864.785	-24485.207	60.069	黄プラ杭小
T11	-19884.186	-24490.939	55.515	撤去
T12	-19863.795	-24525.674	52.385	撤去
TA13	-19856.366	-24496.069	58.532	金属鈺 (道路)
SfM1	-19861.320	-24509.498	56.329	1Tr. 北側 撤去
SfM2	-19862.820	-24509.585	56.207	1Tr. 南側 撤去
1a	-19862.057	-24511.940		1Tr. 下方 撤去
1b	-19862.175	-24506.105		1Tr. 上方 撤去
2a	-19872.524	-24500.109		2Tr. 下方 撤去
2b	-19866.386	-24501.134		2Tr. 上方 撤去
3a	-19870.108	-24496.142		3Tr. 下方 撤去
3b	-19865.009	-24499.885		3Tr. 上方 撤去

さて、発掘調査は、墳丘規模・構造の解明を目的として、2020年8月24日から9月14日までの計22日間で実施した。古墳は北西から南東に傾斜する斜面地に築かれており、すぐ北を通る登山道路によって墳丘の一部が削平されている。また、上半部が失われた横穴式石室が露出している。そうした現況をふまえ、樹木および石室前庭部方向を避けるかたちで、墳丘の西側に1箇所、南東側に2箇所のトレンチを設定した。トレンチの名称は西側から反時計回りで第1、第2、第3とした。

掘り下げを開始してすぐ、西側の第1トレンチでは安山岩礫の集石が検出された。当初、その集石が古墳にともなう可能性も考えられたことからSfMおよび実測にて記録を行ったのちトレンチ北半部を断ち割り、集石の性格および墳丘残存面の確定に力を注いだ。他方、南東側の第2、第3トレンチでは、表土およびその下の粘質土を除去した段階で、安山岩礫が法則性をもたず散漫な状態で多数包含される土層が検出された。以上のような各トレンチの状況をどのように解釈すべきか頭を悩ませたが、熊本大学教育学部名誉教授の渡辺一徳先生に教えを請うたところ、金峰山火山の噴出物が土石流などの作用で二次的に堆積したものである可能性が示唆された。その視点であらためて土層を精査したところ、すべての状況が整合的に説明できることから、安山岩礫の包含土層を古墳構築以前の地山とみなした。その結果、当古墳の墳丘は多くの部分が地山成形によって構築されており、今回の調査では盛土は検出されていないと判断するに至った。発掘調査と並行し、古墳とその周辺地形の測量調査も実施した。測量は、レベルで等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測して方眼紙上に描くという方法によった。測量図に表すと墳丘西側の削平箇所が目視以上に明確に認識でき、それは第1トレンチで検出された集石が後世のものであるとする判断根拠の1つとなった。

コロナ禍での調査であったので、上述したように、学生たちは自宅から現場に通った。しかし、一日の調査終了後にはいったん考古学資料室に集まり、その日の成果と課題、および翌日の予定を確認するためのミーティングをかならず行った。また、現地説明会は、物事を分かりやすく説明するための訓練として教育効果の高いものであるが、コロナ禍の今年は聴衆を現地に集めることは難しかった。そのため、YouTubeによるオンラインでの現地説明会を企画、実施した。2020年9月5日の当日には400回を超える視聴があり、いい試みであるとの評価もいただいた。また、この試みを通じ、平時においても対面とオンラインの併用で現地説明会を実施すれば、遠隔地の方にも調査の様子を見ていただけるのではないかと感触を得た。これは、コロナ禍における思わぬ収穫となった。(杉井)

## 三 墳丘の構造

### 1. 古墳の現状

**古墳の立地** 立田山南麓古墳(上)は熊本市中央区黒髪8丁目222-5番地および226番地に所在する。立田山の南麓、北西から南東方向へ傾斜する斜面の途中に位置している。本古墳は熊本市が管理する「立田山憩の森」内にあり、五高の森駐車場から立田山墓地へ抜ける道路沿いに立地する。現在、古墳の北側には舗装された立田山登山道路が通っており、この道路によって墳丘の一部が削平されている。本古墳は自然公園内に位置し、周辺環境は綺麗に整備されている。周囲の見通しは非常に良く、樹木も丁寧に間伐されているものの、現状では本古墳から白川や周辺に所在する古墳を望むことはできない。

古墳の周辺には1970年代まで繊維加工用のラミー（苧麻）畑が広がっていた。そのため、古墳築造時の地形は大きく改変されていると思われる。本古墳の所在する立田山南麓は古墳や横穴が集中する地域であり、白川右岸の崖面には横穴が、山裾部には横穴式石室を内部主体とする古墳が多く確認されている。

**1955年調査時の測量図** 立田山南麓古墳(上)は1955年に乙益重隆氏らによって調査が行われた[乙益 1971]。その際描かれたと思われる墳丘測量図が『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅰ』に掲載されている[美濃口編 1994]。同書にはこの墳丘測量図は乙益氏から提供を受けたとの記述があり、1955年の調査がまとめられた『熊本市北部地区文化財調査報告書』には掲載されていない。『新熊本市史』史料編第1巻には、『熊本市北部地区文化財調査報告書』にこの測量図が掲載されているとの記述があるが[松本 1996]、実際はその書籍で公表された図面ではなかったようである。

さて、かつての墳丘測量図を見ると(第6図)、立田山南麓古墳(上)は直径11mほどの円墳として描かれている。また、墳頂部には盗掘坑のような窪みがあるのがうかがえる。現在は道路により削平されている墳丘北西側が1955年調査の際には残存していることも知ることができ、この墳丘測量図は古墳の旧状を考察する上で重要な資料といえよう。

**横穴式石室の現状** 立田山南麓古墳(上)の内部主体は単室構造の横穴式石室であり(第6図)、南南西に開口する。天井石や側壁を構成する石材の一部が失われている。玄室内には大型の石材が転落している。これはおそらく1955年の調査後に落下した玄室壁体の石材であると考えられる。また、1955年調査時の横穴式石室実測図からは、玄室床面および羨道の一部に敷石がなされていることがうかがえるが、現状では石室内への土砂の流入のため、床面を見ることはできない。なお、ピンポールによって玄室内埋土の深さを調べたところ、およそ40～50cmであった。これに基づいて玄室床面の標高を推測すれば、およそ標高57.2m前後であると考えられる。(西)

### 2. 墳丘の構造

**今回の測量調査の方法** 今年度は、立田山南麓古墳(上)の墳丘規模を確認するために周辺の地形も含め、測量調査を行った。測量は、レベルを使って等高線を探し、その座標をトータルステーションで計測して方眼紙に等高線を描くという方法による。等高線の間隔は20cm、縮尺は100分の1である。残存する墳丘の墳頂部に測量基準点T1を設置し、石室の主軸におよそ沿う直線上に5つの基準点を設けた。その他にも、補助的な基準点を適宜設定した(第7・8表)。

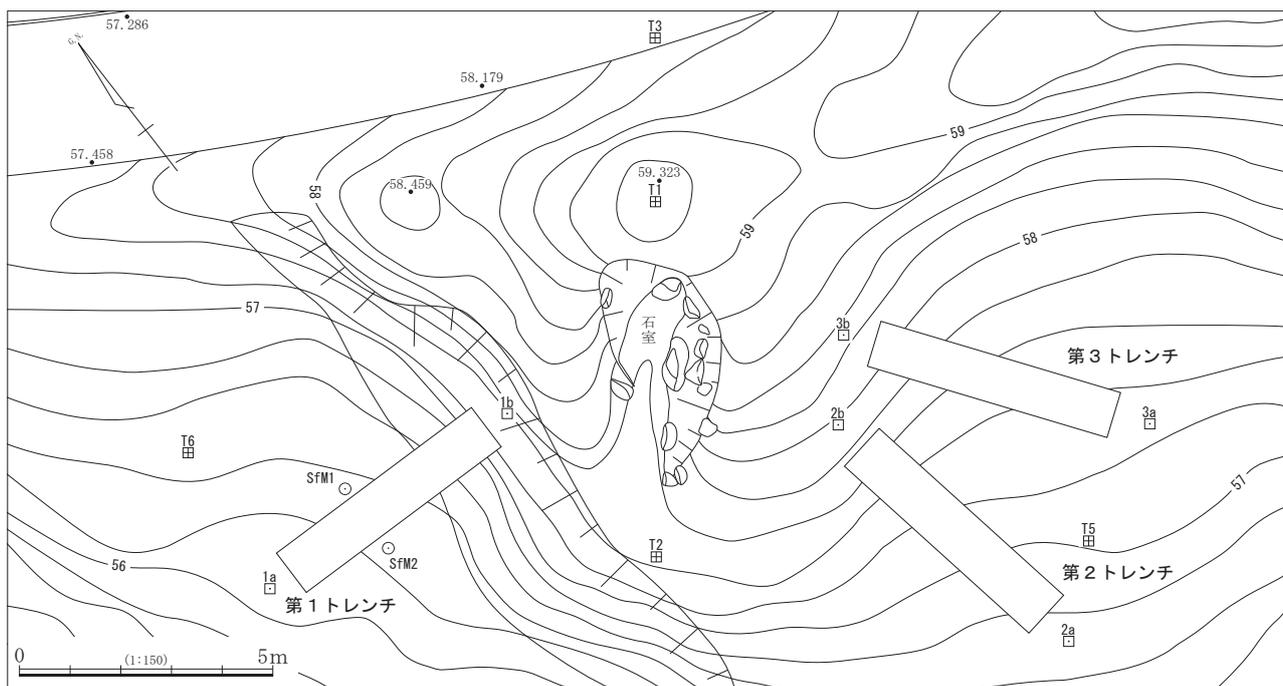
**墳丘の構造** 立田山の南東斜面にはいくつか尾根筋があり、その尾根筋の間に浅い谷が存在する。立田山南麓古墳(上)はこの谷の北東から南西方向へ傾斜する斜面地の途中に立地する。墳丘最高点の標高は59.323 mである(第10図)。基準点T1を中心とする標高59.200～59.000 mの範囲には、直径3 mほどのなだらかな平坦地形があるが、明確な水平面はなさない。墳丘の東側は標高58.000 m付近から等高線の間隔が広まるのに対し、西側は急勾配となっている。墳丘西側、第1トレンチ割り付け基準杭1b付近の標高58.000～56.400 mの範囲は、著しく急な傾斜をなす。古墳の墳丘としては不自然な地形のため、後世の改変を受けていると思われる。この傾斜はSfM計測の基準点SfM1やSfM2の周辺、標高56.400 m付近で緩やかになる。残存する石室を中心とした周辺地形に明確に傾斜の変化する箇所や平坦面が認められないため、段築は有さないとと思われる。また、墳端部の様相は判然としないものの、墳丘東側の測量基準点T5付近で自然地形に沿うような平坦地形が広がることから、この辺りに墳端の位置を想定することが可能である。なお、周溝となるような墳丘を囲む凹地や葺石と思われるような石材は確認できない。

現在、古墳の北側は道路により大きく削平されているものの、古墳築造以前の地形は北東から南西へ向かって傾斜する斜面地であったと想定できる。古墳の墳丘は丘陵斜面の上方を切断することにより形成されていたと考えられ、登山道路はその切断部を利用する形で建設された可能性がある。(西)

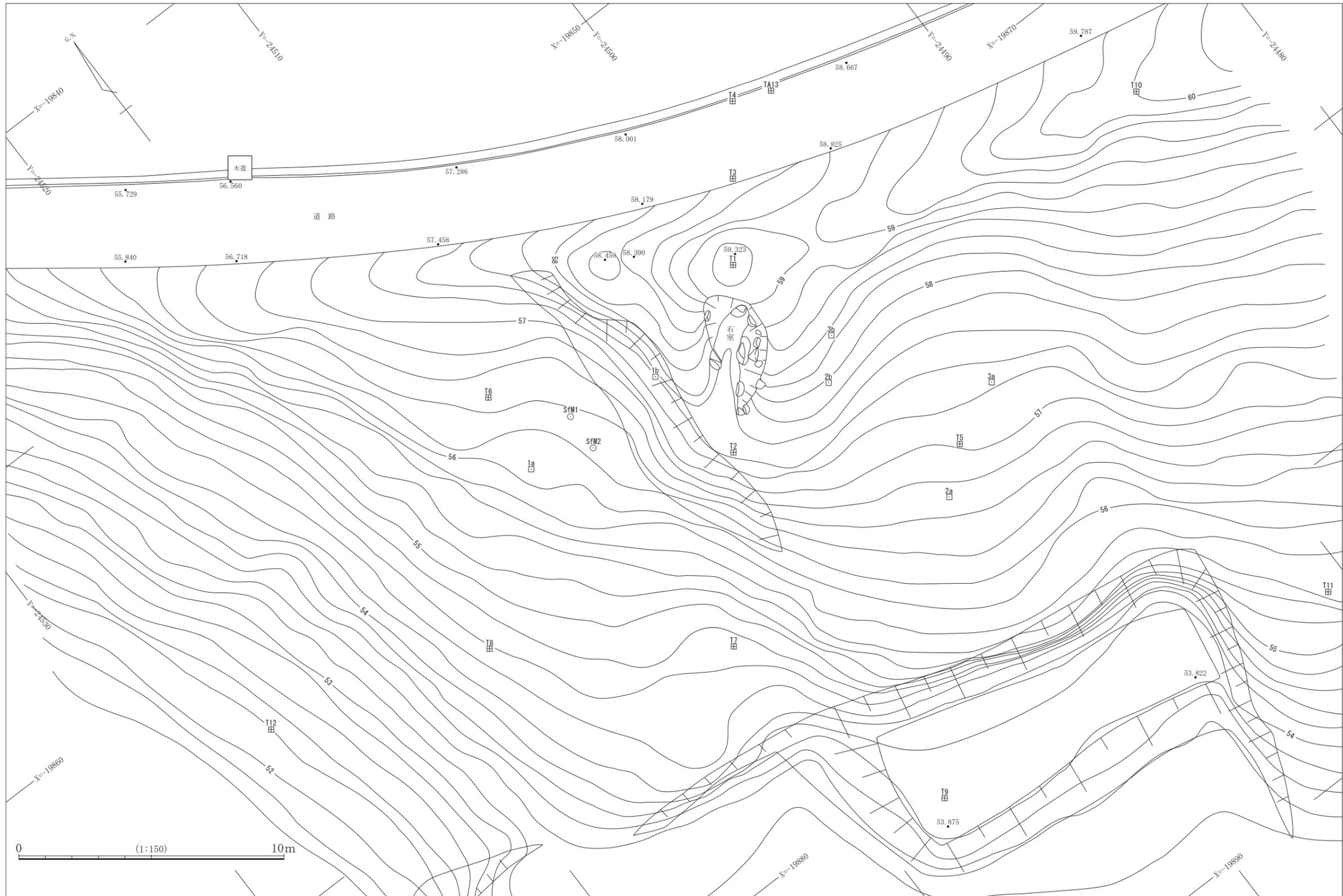
### 3. トレンチの設定

調査目的は墳丘の構造および規模の解明である。トレンチは、当地が保安林であることから樹木の伐採を伴わないよう注意しつつ、また石室の前庭部や墓道による影響も避けることを念頭に置き、さらに可能な限り地形の改変を受けていないと思われる箇所を選んで設定した。トレンチは墳丘の西側に1箇所、南東側に2箇所の計3箇所であり、西側から反時計回りに第1・第2・第3トレンチと呼称した(第9図)。トレンチの規模はいずれも幅1 m、長さは第1トレンチが4.85 m、第2・第3トレンチが5 mである。

(松田)



第9図 トレンチ配置図



第 10 図 立田山南麓古墳(上)墳丘測量図

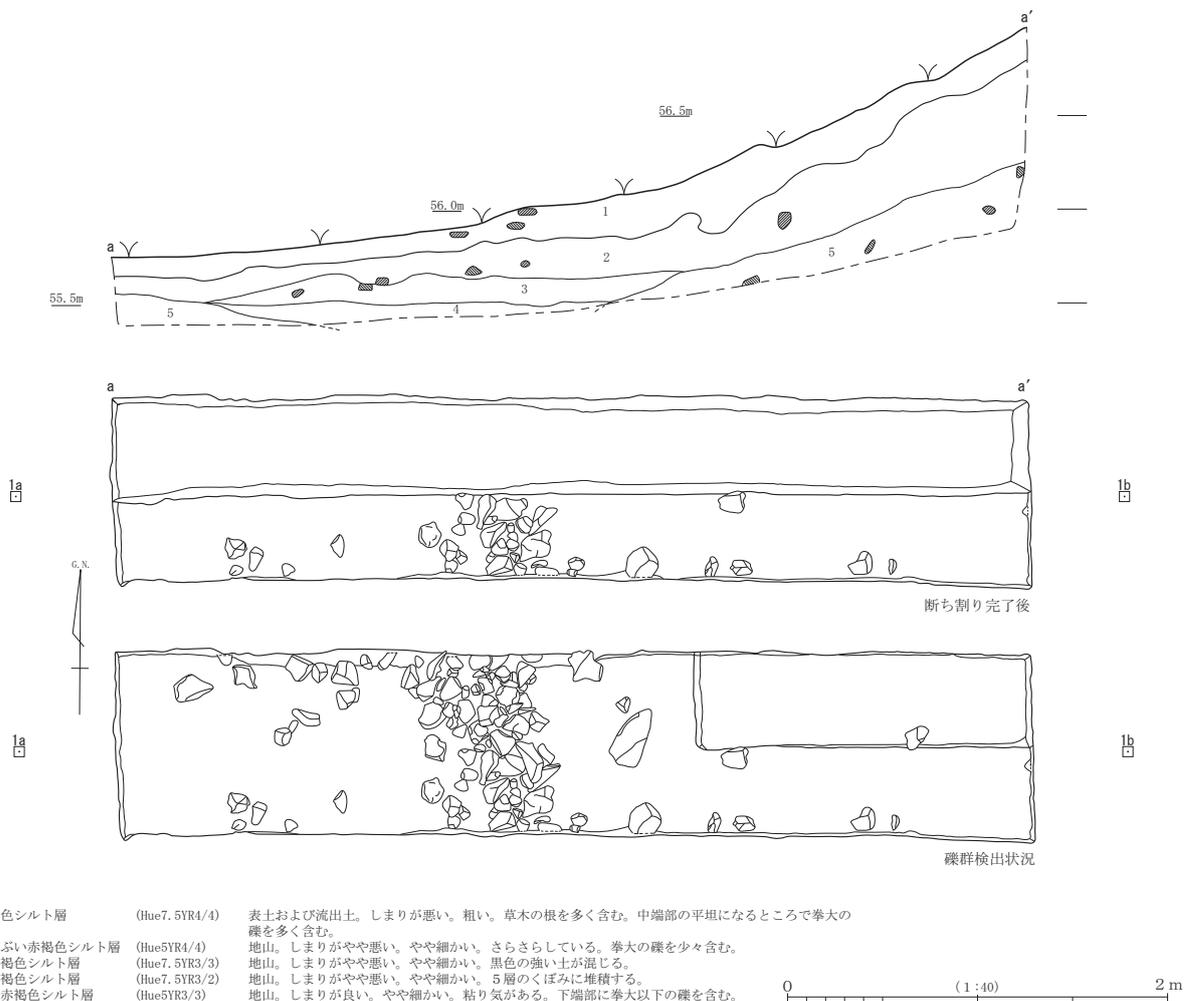
## 4. 調査の所見

## (1) 第1トレンチ (第11図、図版3・4)

第1トレンチは墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘西側に設定したトレンチである。規模は幅1m、長さ4.85mであり、トレンチ東端は測量基準点T1より西に5.6mの地点に位置する。第1トレンチでは、遺物の出土はなく、墳丘残存面の推測が困難であったため、トレンチ北半部にサブトレンチを設定し、墳丘を一部断ち割る形で墳丘残存面を確認した。土層は古墳築造以前の堆積層(第2～5層)と、古墳築造後に堆積した層(第1層)に分けられる。

第5層は、しまりが良く、粘り気のある暗赤褐色層であり、拳大の礫を含む。礫は黒い鉱物が斑点状に混じる輝石安山岩であり、亀甲状の比較的規則正しいひびが見られる。このようなひびは、火山活動の際の冷却収縮によって形成される。立田山は金峰山の裾野に位置し、第5層で見られる礫は、金峰山の上流部で起きた火砕流によって形成された輝石安山岩礫が土石流などによってこの地に運ばれ、堆積したものだと考えられる。第5層の上には黒色の強い第3層・第4層が堆積する。これらの黒色層の性格は不明であるが、第5層上面の凹部に堆積しているように見えることが特徴である。第2層は、しまりがやや悪いにぶい赤褐色の砂質土層であり、拳大の礫を少量含む。

土層検討の結果、第2層以下はすべて地山であると判断した。第5層は、上述の通り金峰山火山の噴出物が二次堆積したものと考えられることから、地山であることは明確であ



第11図 第1トレンチ断面図・平面図

る。第2層を地山だと判断した根拠は、第5層上面の傾斜に沿うように自然に堆積していること、もしこれが古墳の盛土であったとした場合、その下位の地山である第5層上面のうち、少なくとも石室に近い東側が水平に整地されていてしかるべきであるが、第5層にはそのような人為的な改変の痕跡が見られないことなどである。よって、第2層は第5層が形成されたのちに自然に堆積した山土であると判断した。そのため、この第2層上面が後世の削平後の墳丘残存面ということになる。なお、第1トレンチの周辺が後世に削平されていることは墳丘測量図（第9・10図）からも明確に読み取ることができる。

第1層は表土および流出土である。トレンチ下半部では、第1層中において南北方向にのびる帯状の礫群を検出した。礫は下層まで厚く堆積するものではなく、地表近くの斜面傾斜が水平に変わる場所に薄く堆積しているものである。これらの礫群は、後世の削平時に地山に含まれる礫が人為的に集められたものか、あるいは斜面傾斜が水平に変わる場所に自然に堆積したものと推測した。（松本青）

### （2）第2トレンチ（第12図、図版5・7-1）

第2トレンチは墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘南東側に設定したトレンチである。規模は幅1m、長さ5mであり、トレンチ北端は測量基準点T1より南東に6.5mの地点に位置する。第2トレンチでは葺石や埴輪などの外表施設や周溝の存在が認められず、墳丘残存面・墳端を認定する箇所の判断が困難であったため、結果的に墳丘を断ち割ることで墳丘残存面を確定した。土層は、古墳築造以前の堆積層（第3・4層）と古墳築造後の堆積層（第1・2層）に大きく二分される。

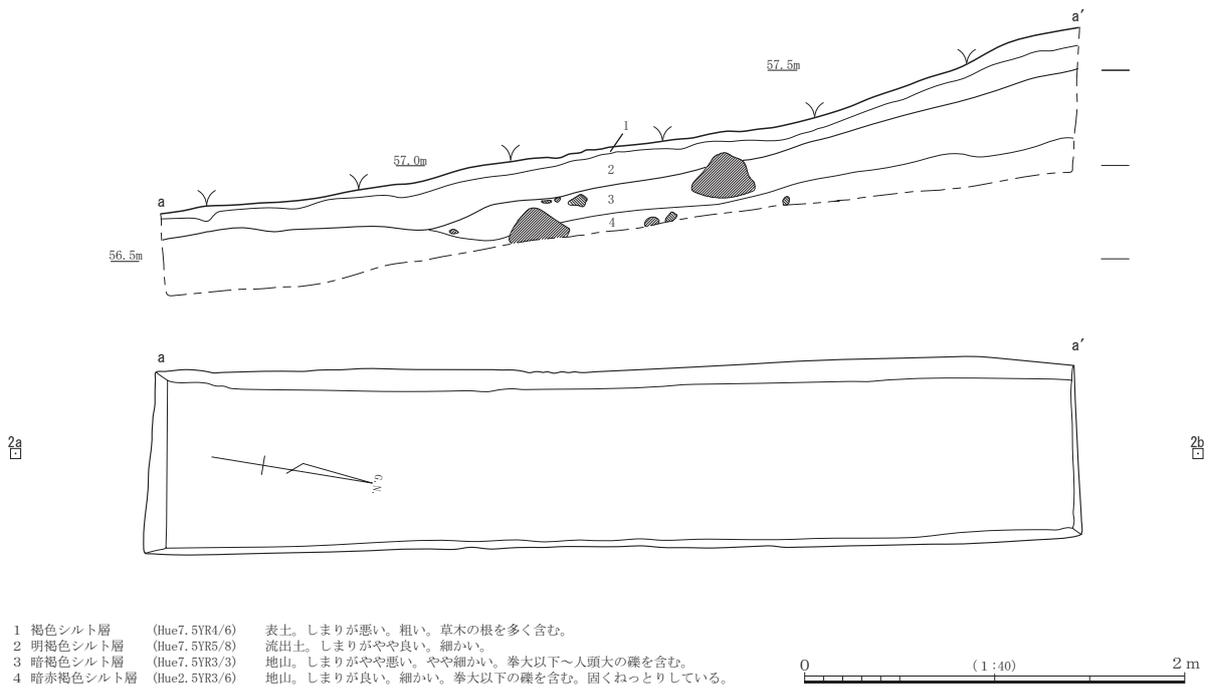
古墳の築造以前の堆積層は、第3層および第4層である。第3層は、トレンチ北小口から南へ3.4mの範囲において確認したしまりが悪く黒色の強い土層である。下位には類似した土質でしまりが良くやや赤みの強い第4層が確認でき、第3層・第4層ともに一部に亀甲状のひびが見られる拳大～人頭大の礫を多く含む。当初はこの石材が葺石である可能性を考慮に入れて調査を進めていたが、のちに金峰山火山由来の輝石安山岩であると判明し、さらに立田山は金峰山の裾野に位置するため、金峰山上方で形成された輝石安山岩が土石流などによってこの地に堆積したものであるとの結論に至った。第3層と第4層の土質が類似していることから、第3層は輝石安山岩堆積層が腐植土化した部分であり、過去の表土であったと推測できる。したがって、古墳築造時にはこの第3層を整地・整形して墳丘を築造した可能性が高い。以上より、第3層上面が墳丘残存面、第3層が途切れて傾斜が水平に変わる北小口から3.5mの辺りが墳端である可能性が高いと判断した。

古墳築造後には第2層、第1層が墳丘残存面の傾斜に沿うように堆積している。（河野）

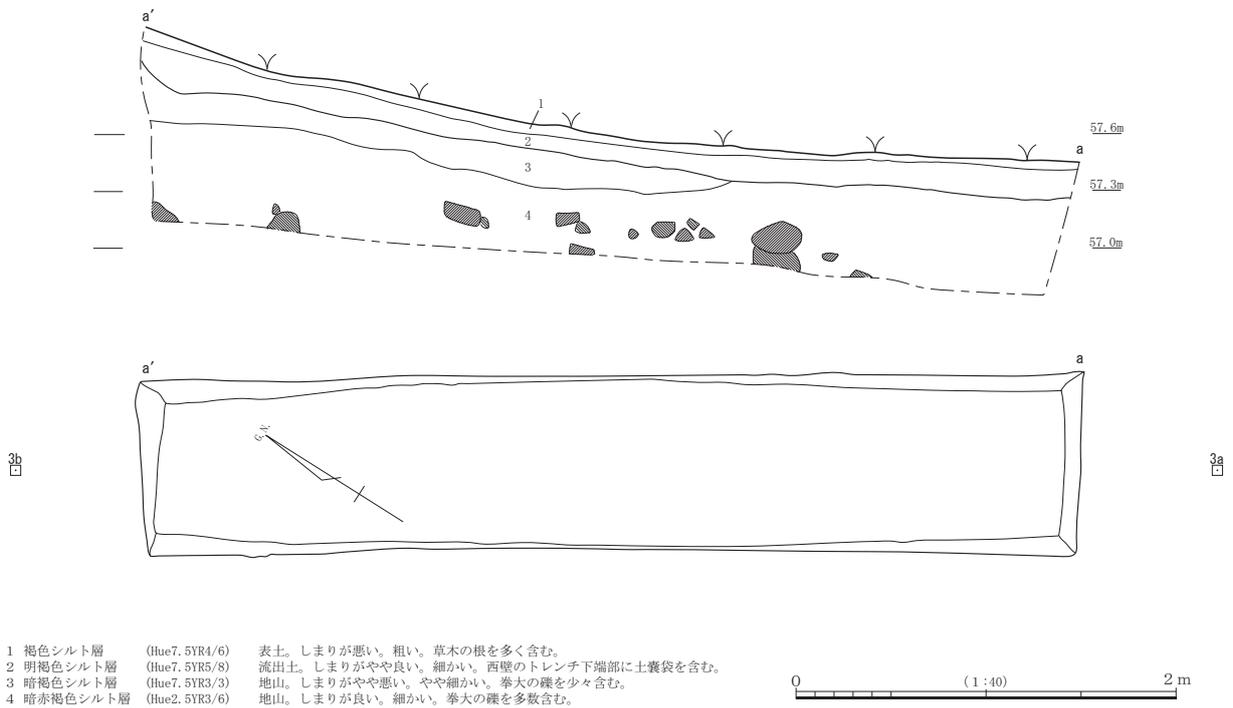
### （3）第3トレンチ（第13図、図版6・7-2）

第3トレンチは墳丘規模・構造の解明を目的として、墳丘南東側、第2トレンチの東側に設定したトレンチである。規模は幅1m、長さ5mであり、トレンチ北端は測量基準点T1より南東に5.1mの地点に位置する。第2トレンチに近接するため、両者の様相は非常に類似している。第3トレンチにおいても葺石や埴輪などの外表施設や周溝の存在が認められず、墳丘残存面・墳端をどこに認定するかの判断が困難であったため、結果的に墳丘を断ち割ることで墳丘残存面を確定した。土層は、古墳築造以前の堆積層（第3・4層）と古墳築造後の堆積層（第1・2層）に大きく二分される。

古墳の築造以前の堆積層は、第3層および第4層である。第3層はトレンチ北小口から南へ3mの範囲において確認したしまりが悪く黒色の強い土層であり、下位には類似した土質でしまりが良くやや赤みの強い第4層が確認できる。第3層・第4層ともに拳大の礫を多数含み、これらは金峰山由来の輝石安山岩であると判断される。第3層と第4層の土質が類似していることから、第3層は輝石安



第 12 図 第 2 トレンチ断面図・平面図



第 13 図 第 3 トレンチ断面図・平面図

山岩堆積層が腐植土化した部分であり、過去の表土であったと思われる。したがって、古墳築造時にはこの第 3 層を整地・整形して墳丘を築造したと思われる。以上より、第 3 層上面が墳丘残存面、第 3 層が途切れて傾斜が水平に変わる北小口から 3.1 m の辺りが墳端である可能性が高いと判断した。

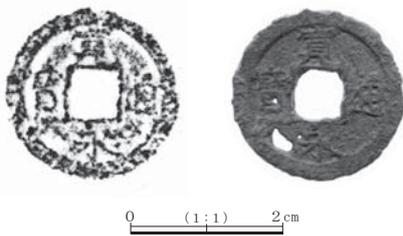
古墳築造後には第 2 層、第 1 層が墳丘残存面の傾斜に沿うように堆積しており、第 2 層からは古銭と土嚢袋が出土している。

(河野)

## 四 遺 物

今回の発掘調査では古墳に伴うと考えられる遺物は発見されなかった。1955年調査時の出土遺物に関しては、調査後の行方が不明であった。しかし、2020年12月、熊本市立熊本博物館の企画展示に宇留毛横穴式石室墳出土とされる遺物が展示され、その内容が『熊本市北部地区文化財調査報告書』に記された出土遺物に酷似していることから、それら展示品は立田山南麓古墳(上)出土遺物である可能性が極めて高いと判断できる。しかしながら今回、それら遺物を資料化することはできなかった。これは今後の課題としたい。以下では今年度調査で出土した古銭について報告する。

**古銭** 第14図は寛永通宝である。第3トレンチの表土掘削時に廃土中より出土した。直径2.3cm、重量2.0gである。表面は錆に覆われており、色調はにぶい黄褐色を呈する。表面には「寛永通宝」の文字が確認できる。「寛」の文字には、その12画目と13画目の頭が離れているという特徴がみられる。また背面に文字や模様などは刻されていない。これらの特徴から、これは永井久美男氏の分類〔永井 1996〕における3期の新寛永通宝である可能性が高い。初鑄年は1697年である。(佐藤)



第14図 古銭表面の拓影・写真

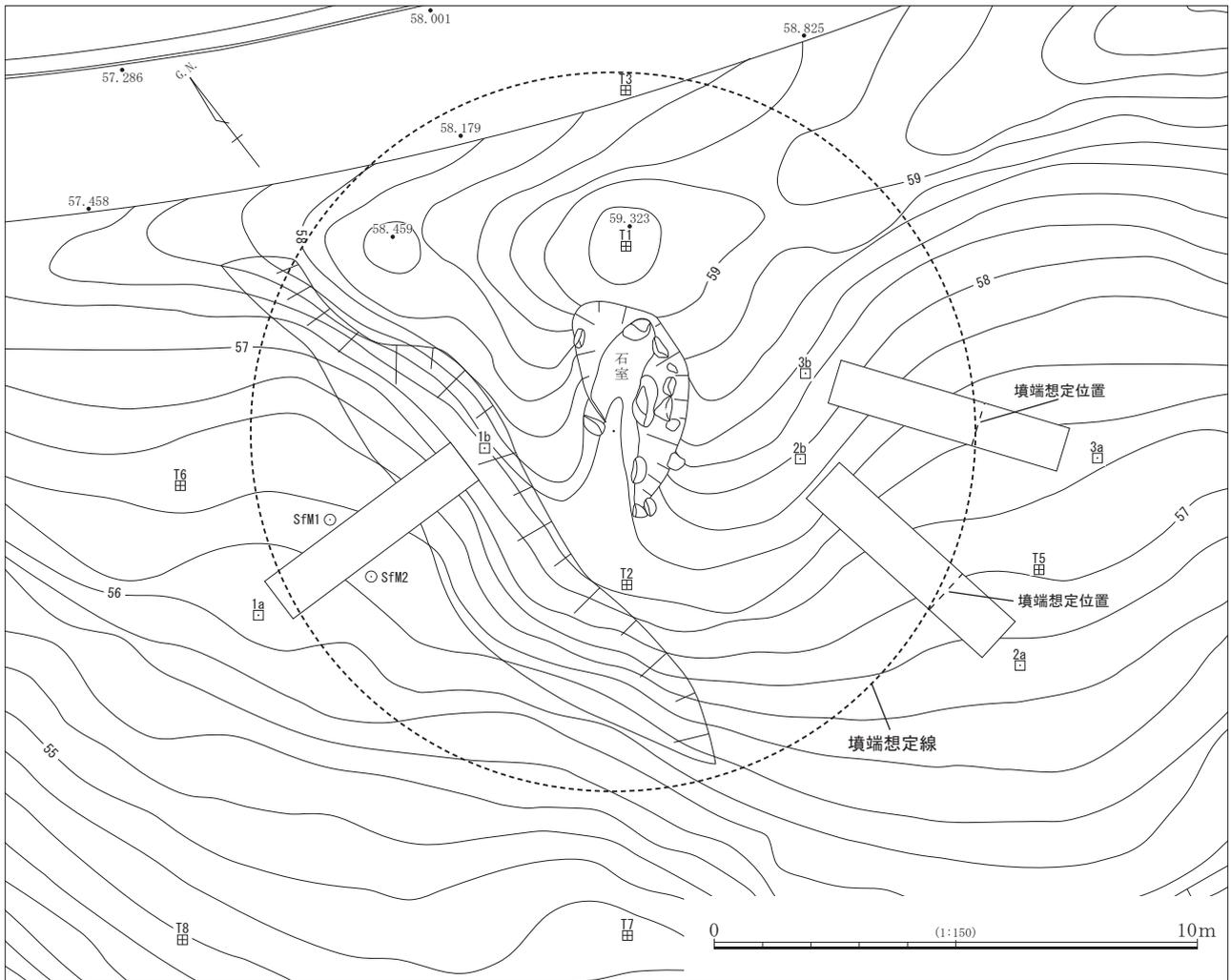
## 五 総 括

本年度は立田山南麓古墳(上)の発掘・測量調査を行った。調査によって得た情報を整理し、立田山南麓古墳(上)のもつ歴史的な意味についてまとめた。

**墳丘形態と規模の復元** 本年度の調査結果をもとに立田山南麓古墳(上)の様相を述べる。今回の調査では、墳丘規模・構造の解明を目的とし、墳丘西側に1箇所、南東側に2箇所のトレンチを設定した。土層検討の結果、各トレンチでは盛土と思われる土層は検出されず、本古墳はそのほとんどが地山成形によって構築されていると判断するに至った。第1トレンチでは墳端と思われるような痕跡が見られなかったが、第2・第3トレンチでは、黒色層が途切れて傾斜が水平に変わる部分が墳端の可能性が高いと判断した。第2トレンチでは北小口から南へ3.5m辺り、第3トレンチでは北小口から南へ3.1m辺りの地点である。この調査結果をもとに、かりに横穴式石室の玄門と考えられる箇所に円の中心を想定すると、本古墳は直径約15mの円墳に復元できる(第15図)。

**立田山南麓古墳(上)の位置づけ** 以上の検討より、立田山南麓古墳(上)は直径約15mの円墳であると推測した。立田山南麓部には横穴式石室を内部主体とする同規模の円墳が古墳時代後期から築造されるようになり、本古墳もその過程で形成された古墳の1つであると考えられる。では少し視野を広げ熊本平野北部をみた場合、立田山南麓古墳(上)はどのような位置にあるのだろうか。

従来より熊本平野北部では前方後円墳が見られないため、強大な力をもつ首長の不在が指摘されてきた〔松本 1998 : p. 719〕。熊本平野北部における古墳築造は古墳時代後期より本格化するが、確かに1つの大きなまとまりというよりは、各山麓や河川に小集団が存在したとみる方が妥当と考える。後期に古墳や横穴が増加する要因に関しては、林田和人氏が指摘する中期以降の集落の増加が密接に



第 15 図 立田山南麓古墳(上)墳丘形態復元図

関係しているものと思われる [林田 2019]。大谷晃二氏は出雲地方の横穴系墓制を検討し、一地域内において横穴式石室墳と横穴が併存する場合、その背景には経済的な階層差があったのではないかと分析した [大谷 2017]。熊本平野北部もこれに当てはまるのではないかと。立田山南麓古墳(上)は、横穴が並行する時期にありながらも横穴式石室を選択した古墳造営集団によって築造され、その被葬者は造墓に用いる労働力を持ちうるだけの人物であったと考えられる。

**今後の課題** 熊本平野の古墳の様相は未だ不明瞭である。その理由は未調査・未報告の遺跡が多いことに尽きるだろう。第 2 部で報告する宇留毛小碓橋際横穴群も詳細をうかがいえない一例である。

さて、今後の課題を 2 点あげておきたい。まず、立田山南麓古墳(上)の内部主体、横穴式石室の調査である。本年度行った調査により、墳形と墳丘の規模は明らかとなった。しかし、肝心の主体部の調査は時間の制約もあり実施することができなかった。1955 年の調査時に実測図は描かれたものの、その分析・検討には不十分な箇所が多い。また 1955 年の調査から半世紀以上が経過し、石室石材が崩落している箇所もあるため、現状での実測図の作成が必要である。次に、過去に出土した遺物の図化である。現在遺物は熊本市立熊本博物館にて保管されているが、図面や写真などは公開されていない。数量の確認、図化と共に、年代や須恵器製作地などの検討が求められる。

立田山南麓部には未調査・未報告の古墳や横穴が多数存在する。それらの分布や内容を明らかにすると共に、立田山南麓部の様相を整理し、古墳時代の熊本平野を歴史的に位置づけていきたい。(西)

## 引用・参考文献

- 網田龍生編 1992『上高橋高田遺跡 第1次調査区発掘調査概報Ⅰ』熊本市教育委員会
- 荒牧昭二郎・中山 洋・長谷義孝・古澤 二 2016「熊本地域の水理地質構成とその地史的背景」『持続可能な地下水利用に向けた挑戦—地下水先進地域熊本からの発信—』熊本大学政創研叢書9 成文堂 pp.9-31
- 市川 薫 2018「熊本市の立田山および託麻三山一帯における1940年代から1960年代にかけての多様な森林利用」『熊本都市政策』vol. 6 熊本市都市政策研究所 pp.29-38
- 猪飼隆明・板楠和子・工藤敬一・松本寿三郎 1999『熊本県の歴史』県史43 山川出版社 pp.10-17
- 大谷晃二 2017「山陰・北陸—出雲地方を中心に—」『一般社団法人日本考古学協会2017年度宮崎大会資料集』日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会 pp.155-168
- 乙益重隆 1971「立田山南麓古墳(上)」『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 pp.151-152,183
- 木崎康弘 2004『豊饒の海の縄文文化・曾畑貝塚』シリーズ「遺跡を学ぶ」007 新泉社
- 木崎康弘 2010『列島始原の人類に迫る熊本の石器・沈目遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」068 新泉社
- 熊本市 2016「立田山」『熊本市生物多様性戦略』熊本市 pp.69-71
- 島野安雄 2015「水の国・くまもと」『熊本の地域研究』成文堂 pp.1-21
- 島津義昭・村上恭通編 1992『二子塚』熊本県文化財調査報告 第117集 熊本県教育委員会
- 新熊本市史編纂委員会 1998『新熊本市史』通史編 第1巻 熊本市
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会 pp.131-184
- 東洋繊維 1968「立田山農場と八代工場の開設」『五十年の歩み』東洋繊維株式会社 pp.58-60
- 豊島昭和 1977「立田山実験林」『三十年の歩み』農林省林業試験場九州支所 p.131
- 永井久美男 1996『日本出土銭総覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会
- 林田和人編 2008『八ノ坪遺跡Ⅳ』熊本市教育委員会
- 林田和人・三好栄太郎編 2018「総括」『小塚遺跡1』熊本市の文化財 第73集 熊本市教育委員会 pp.117-123
- 林田和人 2019「熊本県地域における古墳時代中期の集落概観」『集落と古墳の動態—古墳時代前期末～古墳時代中期—』第22回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会 pp.135-154
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 pp.24-26
- 松崎友理・美濃口紀子 2010「熊本県内における古墳時代の掛甲に関する研究—熊本市檜崎山5号墳出土小札の分析を中心に—」『熊本博物館館報』No.22 熊本市立熊本博物館 pp.52-75
- 松本健郎 1996「立田山南麓古墳」『新熊本市史』史料編 第1巻 熊本市 pp.706-708
- 松本健郎 1998「熊本平野北縁の古墳」『新熊本市史』通史編 第1巻 熊本市 pp.708-723
- 美濃口雅朗編 1994『つつじヶ丘横穴群 発掘調査概報Ⅰ』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗編 2002『つつじヶ丘横穴群—発掘調査報告書—』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗 2001「地域の概要—肥後—」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅰ分冊 第4回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会 pp.525-558
- 横山勝三・渡辺一徳 1991「熊本市および周辺地域の地形・地質の概要と研究課題」『市史研究くまもと』2 新熊本市史編纂委員会 熊本市 pp.53-72
- 「熊本市内の主な遺跡 近年の遺跡発掘調査成果」熊本市ホームページ 文化市民局文化創造部文化財課 (<https://www.city.kumamoto.jp/hpKiji/pub>)

## 挿図出典

- 第6図 墳丘測量図：美濃口編 1994  
横穴式石室実測図：乙益 1971